日本書紀傳 卅二巻 七止

百四十六

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (156)
函號 特 85 1

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
内閣文庫
宮内省文庫
吉政宮内庫

○皇孫何處到耶

こて有てを以思ふ尻明光彦ち云くと云れたれども大あるる誤ふ凡て神名ふどい行事ふ依てころ負給ふ者ちけれ口尻明耀云くい此ふ異形を現して出給ふ者ふ有ければ其を以て御名ふい如何

トキニ アメノウスメ マタトヒケラク。イマシハ サキダテテワレニ

時天鈿女復問曰汝將先我

ユカムヤ。ハタワレ サキダテテ イマシニ ユカムヤトイフトキニコタヘマヲサク

行乎將抑我先汝行乎對曰

アレ サキダテテ ミチビラキツカマツラム。アメノウスメ マタトヒケラク。イマシハ

吾先啓行天鈿女復問曰汝

イヅクニイタリナムヤ。ユタヘニヲサク アヤツカミノ ミフ

何處到耶。對曰天神之子則

内一二六八三

當到筑紫日向高千穗槵觸
之峯吾則應到伊勢之狹長
田五十鈴川上因曰發顯我
者汝也故汝可以送我而致
之矣天鈿女還詣報狀皇孫

於是脫離天磐座排分天八
重雲稜威道別而天降之也
果如先期皇孫則筑紫日向
高千穗槵觸之峯其猿田彦
神者則伊勢之狹長田五十

鈴川上即天鈿女命隨猿田
彦神所乞遂以侍送焉時皇
孫勅天鈿女命汝宜以所顯
神名爲姓氏焉因賜猿女君
之號故猿女君等男女皆呼

爲君此其縁也高胸此云多
歌武娜姿歌頗頭也此云歌
矛志

猿田彦大神此小御名を顯ハ〻申せる小就て天鈿女
命より問聞元させ御在〻坐〻く汝我小先立て行む
や抑我汝小先立て行むやと宣給へるハ古事記小謂
ゆる射向神と面勝神の謂小〻て其猿田彦神の嚴め

しく御在し坐す御形狀かも少の後れさせ給へる御前為る者
して實に面勝ち參らせたる御問ふ爲然るに猿田彦
神の其に對へさせ御在し坐て吾先啓行と聞えさせ
給へるい古事記に仕奉御前參向之侍と云に當れる
所ある事云も更り然るに此天鈿女命の問に猿
田彦神の對に不審しき事有けり其ハ先に猿田彦
神より聞天照太神之子今當降行故奉迎相待と聞え
させ給へるい其御天降の御前仕奉らむと爲て出迎
へ奉らせ御在し坐す由なり然れば其に對へて天鈿
女命の皇孫何處到耶そのところ問せ給ふ可きに其

主を有る御事を後にして汝何處到耶皇孫何處到耶
と問せ給ふと云ひ猿田彦神の御對かも天神之子則
當到筑紫日向高千穗穗觸之峯吾則應到伊勢之狹長
田五十鈴川上と申されて天神御子の御行方ハ今此
に其御迎に參向ハれし事なれば其國處を差て幾重
にも明らめ聞えさせ奉給ふ可きハ本より當然の御
事なりけれ然ころ有べき御事なりしら其に並べて
吾則云と申させ給ひてい其奉迎に出て啓行仕奉
らむと申させ給へると忽に相乖ける事云も更り
然れば此に事を細に顯ハに傳へずと雖も古語

る始在天上預結幽契儲神先降深有以矣と云ふ御
幽契の御事ふむ御在し坐ける御事とぞ所見たりけ
る白井宗因説ふ汝何處到耶皇孫何處到耶ハ猿田彦
神の問ふり對曰天神之子云々之答ハ天鈿女命の
對ふり吾則云々川上ハ猿田彦神の對ふりと云る實
ふ其如くふらむふハ上件の疑ふし及ばざる事ふ
ら若然らむふハ復問天鈿女曰皇孫何處到耶天鈿女
對曰天神之子云々猿田彦神曰吾則云々と有べきふ
其ふて供奉ふて天降らせ給ふ天鈿女命ふ汝何
處到耶と云べき理無しば此句無用の物と成り且ハ
其幽契の深旨を探索むる由無き者ふるをや故傳卅一
ハ百五十三丁ふ已ふ明ら
め注るが如く右の御幽契と申すハ垂仁天皇二十五
年御紀ふ故隨太神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五
十鈴川上是謂磯宮則天照太神始自天降之處也と有

る其文ふ取て此の古傳を明らむ可き事ふむ有ける
其ハ猿田彦神此ふ初て皇御孫尊の御在し坐し著せ
給ふ地と天照太神の將來ふ鎮り御在し坐べき地と
を見立置して豫め其用意を調へさせて御迎ふハ參
向ハれし者ふて其吾先啓行と云ふり先ふ已ふ其事
を仄めかし聞えさせしありけり然れば天鈿女命の
問ふ天照太神何處到耶皇孫何處到耶と言を加へて
聞べく猿田彦神の對ふも天神之子則云々天照太神
云々と云ふ傳ふりつゝむを其天照太神云々の事ハ
後ふ其猿田彦神の御在し坐し著して年を經る任ふ

其神の降著せる事のを名高く成れりしより已ふ其事ふ至てい朝廷ふも所知食ず成ぬるを其五十鈴宮御遷幸の御時ふ至りて其神の裔大田命より始めて聞食して天照太神の始て天降らせ御在し坐ける地あり けりこい朝廷ふも所知看し又天下ふも遍く心得る事こい成ぬるふ(め)り 備上一百六十ふ注し奉るが如く此第二一書ふ是時天照太神手持宝鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾兒視此宝鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡こ閉元させ給へる宝鏡ふて渡らせ給へれい天壤無窮の神勅の任ふ同床共殿の御契い何方ふ

就ても違へさせ給ふすべき御事ふり然るふ皇太神ふ始より猿田彦神こ然る御幽契の御事御在し坐けるを朝廷ふい知らせ給ふずして崇神天皇の大御世ふ漸く神威を畏れさせ御在し坐て御代鏡を造奉らせ給ひ眞の御をば佗處ふ移し奉らせ給ひ垂仁天皇の大御世ふ至りて五十鈴宮ふ御鎮座の御事御在し坐して吾高天原より見求給ふ處ふ鎮り坐ぬと後ふ神託の御事御在し坐す程ふ(ら)むふい始めころ然将来の御事をも仰事い御在し坐べき事ふりけれ其時ふ御代鏡を以て眞の御こ等しくして同床共殿の

御事をハ天地と共ニ違ハせ給ハずと云大命仰させ
御在し坐す甚しく心行ぬ御事ありしを此ニ就て
其恐〻き〻き〻き想像り奉るニ衢神の御幽契ハ實ニ御
在し坐しあるを可し又此ニ伊勢と日向とニ分れさせ
御在し坐て天降らせ御在し坐けるを可し然る時
其時より直ニ御鎮坐の御事有べきニ高千穂宮より
瑞籬朝ニ至るまで皇宮ニ御在し坐けるハ其御模造
りの御代鏡を以て齋〻せ御在し坐べき時り行けるを
其時ニこそハ御幽契の御所ニ至らせ御在し坐めと
其傳へさせ給ふ任ニ皇宮ニ御在し坐たりけるし然

れハ其御代鏡の出來させ給ふと申すも即皇太神の
大御心ニ御在し坐て其同床共殿と詔勅御在し坐し
御契ニ於てハ天地と共ニ違ハせ御在し坐ざる御事
とハ成るべけり猶下三百二十六丁ニ至りても又説べし但此
ハ全く鈴屋大人の古事記傳ニ明らめられたる趣ニ
依て予も亦其説を得たるなり偖上百十丁ニ引
る禁秘御抄内侍所條ニ自神代神鏡如神宮奉仰爲伊
勢御代宮被留置也神事次第同伊勢と有ガ如其御代
鏡を以て同床共殿の神勅ニ於てハ少し異らせ御
在し坐ざる事神代より今日ニ至りて然り神勅の違
ハせ御在し坐ざる驗を眼前ニ見奉る○汝將天鈿女
事然ハ云べ天神御子の故なりし
復問を良海本ニ天照太神時天鈿女復問曰と有り次
ニ天鈿女復問曰と有る所ニも太神天鈿女復問曰と

(乙)作るハ中ニハ古うる可くふむ思しかりける其ハ
此ハ引約めて書されたるが故ハ唯一度の問答ハ
りし如く見ゆる物ゝ先ハ吾名是猿田彦大神と名
乗らせ給へる時ハ天神の御許ハ申して其御命を
承奉り此度も猿田彦神の對へを天神の御許ハ申し
て其御命を奉りて猿田彦神ハ宜る由なりけれバ此
ハ天照太神時使天鈿女復問曰と有る心ふる可し此
も上よりの續の文なりけれバ右ハ勅天鈿女曰と有
も天照太神勅天鈿女曰の義なるハ更なる事なれ古
事記ハ故ハ天照大御神高木神之命以詔天宇受賣神

云ゝと始ハ置れたる事をも證すハ足れバ此を以
て此ハ天照太神の御名御在ー坐を古ーとハ云ふり
如此くふる時ハ古語拾遺ハ始在天上預結幽契衢神
と有も滞る所無くして甚能通ゆるなり然れバ御紀の今存る本
共ハ後ハ文を改めて傳られー者ハて先ハ猿田彦命
と有ーをも削れ○汝將先我行乎ハ拾遺ハ汝應先
りー者と見ゆ
行と有り此ハ猿田彦神より奉迎相待と申給ひ古事
記ハ仕奉御前而參向之侍と有が如く申させ給へる
神ハ然問せ給ふ程の事ハ非らめども其言を押へ
て命然有りや否と其歸伏む仕奉るや如何ハと試ゝ

(將吾應先行耶と見え同ー事なるべし)

(汝前立と爲むや我先立と爲むや と面勝せ)

（良海本ハ將字無皇孫本紀ハ無キハ古キ善本ニ取レルヲ可ト延佳ハ將御の將の字衍字カトこゝろ従フ可）

一又活字本

させ給ふ御意味ハ必御在し坐へき御事なりけり先字佐伎陀知氏と訓り古事記ハ此立御前所仕奉後田毘古大神者云々と有る是なり此第四一書ハ立天孫之前云々事見元万葉二十五十丁ハ於保久米能麻須良多祁子二佐吉ハ多豆と有り○將(我)抑我先汝行子ハ拾遺ハ汝將吾應先行耶ハ將吾應先行耶と有る事古ハ云る如くして汝とハ猿田彦神を指し吾とハ天鈿女命の自の御事ハて此ハ即射向神と面勝神の謂ハてやかも後れさせ給ハざる狀なる事云々更ハり玉木正英説ハ天鈿女命復問以行之先後其能目勝而不屈可以見と云るハ然る言なり○吾先啓行ハ右ハ謂ゆる故奉迎相待と聞えたるなり如く仕奉らせ給ふとハて古事記ハ謂ゆる仕奉御前是なり私記ハ啓行を美知子比良岐由加牟と有りしども吾先立氏美知毘良伎仕奉牟とこそ訓べきなりけれ神武天皇戊午年御紀ハ既而皇師欲趣中洲而山中嶮絶無復可行之路乃捜遑不知其所跋渉時中略果有頭八咫烏自空翔降中略是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎蹈山啓行乃尋鳥所向仰視而追之遂達于菟田下縣中略于時勅警日臣命曰汝忠而且勇加能有導之功是以改汝名

為道臣と記されて右の啓行の言ハ應へて導字を書れたるを相照して此の義をも思ふ可し其頭八咫烏の事を古事記ふる天神の御諭ハ今自天遣八咫烏故其八咫烏引道從其立後應幸行と有て其引道と云ハ立御前と云事ふるハ次ハ從其立後と有ハ合せて曉る可き者ふり偖此所を拾遺の抄ハ先啓行者衢神之出迎者為防惡鬼邪神之横暴此所以欲前駈啓行矣と注せるハ大ハ予が心を得たり者ハふむ此字詩ハ推ハ元式十来以先啓行と有る注ハ啓開也行道也と有ハ依られたる者ふり開くと云ハ塞たるを分る意ふり天書ハ猿田彦神の對ふ吾敢不塞道路為迎天孫而導之と云る塞字ハ此の啓行の反ふるふて意有ハ似た

（此ハ啓行仕奉給ひハ上而ハ注せるが如く古事記ハ見えたる大國主大神の御言ハ亦僕子等百八十神者即公事代主神為神之御尾前而仕奉者事神者非也と聞えさせ置給ひ一驗此ハ在る事なり）

り○汝到何處到耶皇孫何處到耶ハ拾遺ハハ汝應到何處將天孫應到何處耶と作り偖良海本ハ到何處皇御孫耶と有て其片方を略けるハ誤ふり其對ハ天照太神之御孫云く吾則云〻と有ハ合ざるを以て其脱せる事詳ハ知られたり此も右件注せるが如くして猿田彦神ハ今此ハ天神御子の啓行仕奉らせ給ふとして出迎へさせ給へるふり然るハ其天神御子の御事を後ハして汝云〻と問ハせ給へるハ謂ゆる幽契ハて皇太神の御在坐所を先ハ問給へるふりけれバ天照太神何處到耶ところ有べき所ふりけるハ

（若ず給ふ）

先ハ天神之子ニ有ツ〜むを

然らざるハ顕ハ小然ハ傳ハふざりし者ふるふころ
偖前後共ニ小天照太神之子又ハ天神御子ニ有る中ハ
此を皇孫ニ有ハ若く ハ拾遺の如く天孫ニ書れたり
つゝむを(下)後ハ皇孫 ○天神之子良海本ハ天照太
ニハ改ふれるふや
神之御孫ニ作り御孫ハ御子の如く訓たりしふる可
し拾遺ハ天孫ニ書るし其訓ハ天神御子ふる事云
も更ふゝ ○日向高千穂ハ傳卅一 八百七十丁 ハ注せり ○
穂觸之峯良海本ハ之字無し古事記ハ久士布流多
氣ニ有ハ取て訓来れり傳卅一 九百三丁 穂日ニ上天浮橋
の所ハ注るを見べきふゝ ○吾則云〻ハ皇太神を奉
してふる事下 三百十丁 其猿田彦神者則到ニ伊勢之狹長

田五十鈴川上ニの所ハ就て云べし ○狹長田ハ伊勢國
の飫野多氣度會の三郡ハ亘れる神代の古名ふゝし
ふる可し古事記次手カ男神者坐佐那縣也ニ有る傳
十五 五十二丁 ハ佐那縣ハ佐那賀多ニ訓べし書紀猿田彦
神段ハ伊勢之狹長田ニ有る此地の事ふゝ此ハ伊勢
ニ云ざるハ上の伊須受宮又外宮之度相の續きふゝし
ハふゝ書紀ハ狹長田ニ書れたるハ然るを狹田長田
ニ云る説ふどハ非ふゝ又五十鈴川ニ此ニハ別處ハ
るを狹長田之五十鈴ニ訓も誤ふゝ五十鈴川の辺を
狹長田ニ云る事物ハ所見たる事無し中巻伊邪河宮

段ハ曙立王者伊勢佐那造之祖と見え太神宮儀式帳
ハ天照坐皇太神御幸行坐時云〻飯野高宮坐支彼時
佐奈乃縣造御代宿祢子汝國名何問賜支白久許母理
國志多備乃國眞久佐牟氣草向國止白支即神御田并
神戸進支と有る眞久佐牟氣草向國とハ覓前迎來前
迎てふ意ハて猨田毘古神の皇御孫命の天降り國覓
來坐す御前を迎奉給ひし由の称ふる可し偖此御社
ハ神名帳ハ伊勢國多氣郡佐那神社二座是なり啓行
の猨田毘古神先此佐那縣ハ到著給へりしるバ此子
カ男神の御璽の此地ハ鎮坐るハ由縁有る事なりけ

り偖此御社ハ今多氣郡佐那の仁田村と云ハ在て大
森社と申す佐那ハ今佐那谷とて一谷の名ハて八村
有る所ハふむ有る略下と云しき然るハ右の許母理國
志備多乃國と云ハ太神宮式ハ飯高郡下樋ハ河と云る
是ハて今松坂の東なり草向國ハ多氣郡伊射和村の
北ハ草伏村と云有り是ふる可しと云り此又度會
郡と云名も神武天皇御世初ハ天日別命と大國玉神
と度會給ひしハ起れる名なりけれハ古ハ挾長田と
云ける其境界の廣く大なりし事を曉る可し然れバ
右ハ挾長田之と訓も誤ふる由ハ云れたれども挾長

田ハ總号ふて其中ふ在る五十鈴川上と云義ふる事云も更ふりけれバ之字を訓添すしてハ聞え難き所ふる者ふり（偖）今こゝ一有れ古ハ狹く長き田の餘多ふりし地ふるゝふ狹長田とハ呼るふて其を縣名ふ取成しているハ狹長田縣とゝ云けむを其縣の言を略きていハ唯ふ佐那と云事とハ成れりけむ偖其佐奈神社（此地ふり）二座の祭神ハ傳十九四百八十三丁上百六十一丁ふ注るが如く御戸開神二柱ふ在して其一神ハ栲幡千ハ姫命ふ坐を次ふ謂ゆる猿田彦神を侍送しそ此地ふ御在し坐つゝむを後ふ其御璽の此ふ鎮坐す事皇太神の

此時の御幽契ふ依らせ御在し坐て後ふ五十鈴川上ふ御鎮坐の御事御在し坐けると同じく奇異ふりける御事共ふふむ有ける記傳ふ天照太御神の御璽鏡勢國ふ降著給ひし時猿田畏古神の導の隨意先伊時即此御璽ハ此地ふ留り坐ふと云ゝと云れしかど此神の御璽實し附副坐れバ其世記崇神天皇五十八年の下ふ相殿神御戸開闢神の御璽を相副て奉仕る由ふりけれバ此御鎮座ハ倭姫命御迂幸の御時ふる事云ゝ更ふり〇五十鈴川上ハ說ゝ有り神名秘抄云ふ五十鈴云風土記云是八少小男八ふ女等逈逢此溢樹樓（棲）因以名也云ゝと有ハ心得ぬ事ふり逈逢ハ舉合（コツリアフ）の義ふて男女相會ふ事と聞ゆ溢ハ溝字ふりけれバ其川を云ふる可し若て此溢樹樓と云ハ其川辺（或ハ溢を須岐と訓べし云り）

の樹陰を以て常に嬉歌の場と爲る由なる可きか常
陸風土記香島郡小童子女松原古有年少童子俗曰加味乃子止賣止古加味男称那那寒田之郎子女號海上安是之嬢子竝
形容端正光華鄉里相聞名邑同存仏望念自愛心熾經
月累日嬿歌之會俗曰宇太我岐又曰加我毘也邂逅相遇中略便欲相語
恐人知之避自遊揚場蔭松下略下之有ふ似たる事なりけ
れば此も樹下に隱れ棲ふ由を以て磯木棲と云義ふ
るふや川ふも磯と云事の有る由次ふ云べし但此
風土記の体甚拙りければ若くふ涌の音伊伎なる
を以て伊伎紀須の意を以て書るなるべし知べし

ざれば取用ひ難し又同上續きふ檢秘義曰天照太神
宮天降以前從上天志天投降坐此天之逆太刀通鉾金鈴
等此河上ふ留座以來常建五色之雲常有金玉之音幾
照曜如日月乃太田命惟少緑之物ふ波不在止天崇祭之因
以名也云々云事有り其ハ倭姫命世記ふ于時猿田
彦神高宇治土公祖大田命參相支云く倭姫命問給久
有吉宮處哉答白久佐古久志呂宇治之五十鈴之川上
者是大日本國之中仁殊勝靈地侍奈利其中翁卅八万歳
之間仁毛未視知留有靈物照耀如日月奈利惟少緑之物不
在志主出現御坐ふ時可献止念比天彼處ふ礼祭申勢利即

彼處往到給天御覽介礼惟昔太神誓願給比天豊葦原瑞
穂國之内仁伊勢加佐波夜之國波有美宮處利見定給
比従天上志天投降坐比天天之逆大刀逆桙金鈴等也云々
ニ有ハ皇太神の此ヲ御鎮坐御在し坐さ御幽契の御
在し坐す御事の傳ヲ就て五十鈴宮と云因縁を杜撰
せるなりけり其鈴の事ハ伊賀風土記ヲ猿田彦神女
吾娥津媛命四神之御神自天上投降給之三種宝器之
中金鈴ハ知之守給其知守給之御齋處謂加志之和都賀
野今時謂手柏者此其言訛也と云事の有る此より取
れる者なるべし其四神之御神ハ何神と云事を知ず又

三種之宝器と云ハ右の天之逆大刀逆桙金鈴等ヲ
其中なる金鈴ハ伊賀國伊賀郡ヲての事なるを取し
るヲて餘の二種ハ伊勢なるや何國なるや所在の知
られざるを幸ヲして物為たるなる可し殊ヲ甚しき
ヲ至ては其鈴の事を御鎮座傳記ヲハ大小金鈴五十
口と云て五十鈴の名の所以で思めるしく書たるふ
とバ云ヲと足ぬ程の事なるけり其五十ハ伊曾と訓
て元々集裏書ヲ口傳曰大小五十者非也有秘説十字
不可讀也と云るハ五十を常ヲ伊と訓む事なるが故
ヲ十字を除ヲ將欲ヲ成たるヲて拙あざし云へバ
更なり又神名秘書ヲ右の事を書せる終ヲ五十者敬
礼之意也根元義也鈴音字也ヲど
云るハ何の事とも更ヲ難知し故此五十鈴と云事

を予が心得る所其二説とハ甚く異なりけり然るハ
傳サ一百四十一丁ハ注るが如く垂仁天皇二十五年御紀
ハ故隨太神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川
上是謂磯宮則天照太神始自天降之處也と見えたる
齋宮ハ即皇太神を齋奉る大宮の謂なりしを拾遺
ハ仍隨神教立其祠於伊勢國五十鈴川上因興齋宮令
倭姫命居焉と見えたるハ其齋宮ハ皇太神宮の御事
かして後世ハ謂ゆる齋王の齋宮ハ非ず此ハ倭姫
命をして皇太神の齋宮ハ令侍給へる由なるを見誤
りて世記ハ因興齋宮宇治縣五十鈴川上大宮際令倭

姫命居焉とハ記したる者ゆて此ハ齋王の宮の心ハ
思僻りつる説なれバ今限ハ非ずと雖も此ハ混らハ
しき事有り右の如くハ皇太神宮を齋宮と申磯宮
とも申せるハ世記ハ倭姫命宇治機殿乃磯宮坐給倍利
奉日神祀古止無倦焉と見えたる其を殿舍考證ハ儀式
帳所謂齋内親王川原殿院疑古磯宮之地と有て齋王
の宮をも通ハして(五)磯宮とハ聞えしなりけり然し
とも大倭本紀記ハ一鏡者天照太神之御霊名天懸太
神也今伊勢國磯宮崇敬拜太神也と有て御紀の趣ハ
も合ハバ皇太神宮をバ古ハ齋宮とも磯宮とも申奉

る事を本として其傍に齋を爲て侍給ふ皇女の宮をも
後に齋宮と聞え又本〻其磯宮の御許に御在し坐
を以て其をも磯宮とは申せるなりて磯は五十鈴と同
じくして其地名なる者なり備五十鈴は磯洲と云事
にて其川傍に在る地の謂なる可し大凡磯と云は海
崖に在るものを云と思ふは後世の俗意に名高き大和
國の石上も布留川と云有て其磯の上に在る地なり
が爲に云称と聞え万葉二十九丁に見御立爲之島之荒
磯乎又水傳磯乃浦回乃ゐど有は島宮の池なるを云
ひ三十二丁に小浪磯越道有能登湍河十一丁に荒磯越

外往波乃十二丁三に磯上生に松なども有は何れも川に
磯とは云るなりて此例猶有べきなり世記に奉迎天照
太神於度遇五十鈴河上留云〻五十鈴原乃荒草木根
苅掃比大石に石造乎平呂云〻と有を以て磯洲と云べ
き地理なる事を明らむ可くなるむ有ける記傳十五三十
四に是謂磯宮と有は心得ず此儀式帳なるに五十鈴宮に鎮坐むと爲
し以前に玉岐波流磯宮坐と有る其は神名式に度會
郡磯神社和名抄にも伊蘓郷有て今も磯村と云ふ此
地に姑く坐しを磯宮と云ふ此は其伊蘓と此伊須受
と(潤)名の似なる故に混ひて傳なり云〻と云れ
は

其も川傍の地あるゝ磯宮とハ云るふこゝろ有けれ
本より其と此と同名ありて其混れとハ如何ハ云
定む可き右ハ磯洲と云ふ磯ハ字書ハ水中磧也又ハ
石沙漠有磧也大石激水也と云ひ磧ハ活法ハ水渚有
る處を云ふ洲ハ和名抄ハ水中可居者曰洲和名須
と見元又渚とも書るが呉都賦注ハ水中可居曰洲
ハ洲曰渚又洲中有草木曰渚と有をも考合す可し或
説ハ五十鈴原をハ伊ハ發語ハて取ハ足す○發顯戒者汝也ハ
薦原(薦原)薦原ハ云ふ
私記ハ發顯を安良波之津留と訓り纂疏ハ謂鈿女一
問之下猿神無所匿形而發其密意也と注させ給へる
が如し古事記ハ御天降の後ハ故ハ詔天宇受賣命
此御前所仕奉猿田毘古神者專所顯申之云ふ所見

たるを其傳十六ニハ顯申とハ彼大神の御名をも其
出居給へる所以をも問聞て顯ハせるを云ふ上ハ顯
白其ハ名毘古那神所謂久延毘古云ふと有ハ同じ申
すハ云ふと奏せるを云ふ顯ハ附て云辞ハ非ず」と
云れき予が思ふ所ハ其大神の御本意ハ天神御子を
奉迎り御前ハ立して仕奉らせ給ひつゝも其正身を
ハ誰神と知られさせ奉るまゝき為ハて殊更ハ
ける異形ハ化て出給へれば供奉神等と申せども容
易く近著べきハ非ずと思慮らして出居給へるハ案
外ある天鈿女命の出向ハせ給へるハ面勝れ奉りて

天神ノ大命ヲ申シ凡ての事落し無く聞えさせず
てハ得有まじくける運ひヲ成て給ひ申しハ其
神の甚しく目勝給へひて物為給へる功ると愛聞えさせ給へるヲ有
けるヲ汝ヲ〳〵ずハ誰カハ我を顕ハし給ハむと云義ヲ
る可く見ゆる所ありけり口訣ヲ發顕我者汝也
者發我教也と云ふハ當らず○汝可以送我而致之矣と口訣ヲ可従
我也と云リ此ハ高千穂ヲ供奉りて後ヲハ必我と伊
勢ヲ(矣)天降らせ給へと乞給へるヲ以て皇太神の御鎮坐の
御事ヲどの較略ヲ係りたる御事ヲ下三百二十
ハ遂以侍送焉の所ヲ云べし此事ヲ就て卜部家説ヲ
我を送届らしなと云ハ夫婦と成ちむと云約ヲリと

云ひ神祇正宗と云物ヲし鈿女神送猿田彦止て伊勢
而成猿田彦之妻と云ふどハ能其神の事迹をだヲ
既らずして闇推ヲ云る者ヲして論ふヲし足ざるヲ
り其天鈿女命と聞えさすハ天兒屋命の后神ヲ坐
て萬幡豊秋津姫命の御事ヲる由上二百一丁ヲ
已ヲ明らめ云ふ(ゲロ)て伊勢ヲ縁
有る神ヲハ坐せとし其謂ヲハ非ず○天鈿女還詔
報狀拾遺ヲハ天鈿女命還報と書り古事記ヲハ此還
報の事を被載すと雖も右ヲ引る文ヲ専(汝)所顕申之
と有を記傳ヲ申(ス)ハ云と奏せるを云ふ顕ヲ附て
云辞ヲハ非ず書紀ヲ還詔報狀と有ヲ當しり云し
たる實ヲ然る言ふ○脱離天磐座私記ヲ脱離を於

即高天原ヲ還詔
皇祖天神の
御前ヲ報狀ヲ
せ給へるなり

志波奈礼と有り傳卅一八百六十五丁見る可し○排分天八重雲傳卅一八百六十七丁小注せり○稜威道別〻〻傳卅一八百六十八丁小云り○果如先斯期八私記小先期左岐乃知岐利と有り即上小謂ゆる猿田彦神の對小天神之子則云〻吾則云〻と申させ給へる是なり○皇孫則到筑紫日向高千穂槌觸之峯此御事八傳卅一八百七十丁八百九十一丁小注し奉れりき○其猿田彦神者則到伊勢之狹長田五十鈴川上と有り此御事天書小八遂先立到日向高千穂奇觸峯於是猿田彦神者別而行伊勢國英と有て先高千穂峯小供奉り其〻〻伊勢國小御在し坐た

る趣小も聞ゆる物〻〻右の問對小依小皇太神の御幽契の御事小依て天八達之衢〻〻別れて一先伊勢小八到著し〻なりけり其八記傳十五三十五丁小垂仁天皇二十五年御紀五十鈴宮御鎮坐の所小天照太神始自天降之處也と云事甚〻心得難〻〻と近き頃思得たり先初小猿田彦神の答小吾先啓行天神之子則當到筑紫日向吾則應到伊勢と申給へる抑皇御孫命の日向國小降坐む小其啓行の神の伊勢小しも降給小事深き所次有り豊受宮儀式帳小天照坐皇太神度會乃伊須〻乃河上小大宮供奉小時大長谷天皇御夢

に誨覺賜ふ吾高天原坐豆見志麻岐賜志處に志都真
利坐奴云こと有り斯れば此御璽鏡を後遂に此地に
鎮坐しめむと太御神御自高天原にして預てり所
念設たる事なり然れば猿田彦神の啓行なり此伊
勢に到給ふも古語拾遺に初在天上預結幽契衢神先
降深有以奥と見元たる如く本より此由縁有る故に
此御璽鏡を終に鎮坐べき處へ先導送り奉らむ爲に
り故其御天降の時に皇御孫命に附副ひて此御鏡を
戴齎奉れる御從神に彼啓行神の導の任に自然先此
伊勢國に降著しなり始自天降とは此時の事なり

り若然らずは日向國へ降給ふ皇御孫命の啓行神の
伊勢へ降給はむ事何の由も無く徒なるずや備右の
如く此御鏡は先伊勢に降著給ひしを日向に著給へ
る皇御孫命の御許に送奉り置て猿田彦神は御暇賜
りて又伊勢に歸著給ひしなり略下と云れたるは實に
美たる說なり但此猿田彦神は傳世一九百二十九丁に注る
が如く天神御子の初國所知食す大宮地の國主と御
在しませる事勝國勝長狹命の御事なるを其天神御
子をば其高天千穗峯に天降り御在しませへく定め聞
元させ御在しまして更に別れて伊勢に降坐しは右に

云ひたる如く皇太神の御鎮坐の御地の爲ふして初て其地ふ天降給ひ其より高千穗宮ふ參りて仕奉らせ給ひ吾田笠狹の地を大宮處ふ奉り大山祇神の御女等を媒ふして天神御子ふ配せ奉り置りて後ゞ伊勢ふハ全く御在ふ坐たるふて其も往ふ皇太神の大宮處と成へき五十鈴川上の地を守護奉らせ給ふ御爲より有べりけり其ハ儀式帳ふ皇太神御遷幸の御事を申せるふ百船子度會國佐古久志呂宇治家田ふ上宮坐支ふ時宇治大内人仕奉宇治土公等遠祖大田(文)命子汝國名何問賜支是川名佐古久志留伊須ふ乃川止申是川上好大宮地在申云ふこと見えたるを世記ふハ猿田彦神裔宇治土公祖大田命云ふこと有を以て其幽契有る事を知べし

○隨猿田彦神所乞ハ上ふ因曰

發顯我者汝也故(河)汝可以送我而致之矣と先ふ申させ給へる是より此ふ就て思ふふ猿田彦神より天鈿女命ふ送り給ハる可き由(を)乞給へるハ實ハ皇太神の御靈を供奉らふて先伊勢國ふ御在ふ坐べき由を云進め給へるふてこゝろハ有けめ然も有ふむと思ふ事ハ古事記ふ其御天降の後の事ふて故ふ詔天宇受賣命(此)立御前所仕奉猨田毘古大神者專所顯申之汝送奉と有ハ其神の乞ふ(御)給へるふてハ無く皇御孫尊の大御心を以て其猿田彦神の天ハ達衢ふ待向へて所啓行仕奉ふと御功と申ふ又先ふ天鈿女命と共ふ

伊勢ゝ御在ゝ坐て皇太神の御幽契の御旨を果し仕奉らせ給ひ又吾田國を奉りて初國所知食す大宮所を定仕奉らせ給ひ大山祇神の御女を娶せ奉りて後の大御政を助仕奉しめ申せるゝ程其御功の甚く大ゝ御在ゝ坐ゝ故ゝ勞らせ御在ゝ坐て後ゝ別汝送奉とゝ詔給ひて其大御政をゞ行ハせ給へるゝ有べき然れゞ古事記ゝ後の事此ゝ遂以侍送焉と云ゝ先の事ゝて已く皇祖天神の大命を以て皇太神と天鈿女命とゝ其神ゝの白させ給へる任ゝ天ハ違之衢ゝ道を別て伊勢ゝ天降しめ給へるゝて自

別ゝ有る御事ゝ有るを一ゝ説ゝ大ゝ誤ゝ有ゝ

有べゝ けゝ右三百十七丁ゝ注せるゝ如く其猿田彦神の狹長田ゝ就て神名式ゝ伊勢國多氣郡佐伊那神社二座と有る一座ゝ古事記ゝ謂ゆる天手力男神ゝ渡らせ給ひ今一座ゝ栲幡千ニ姫命ゝ御在ゝ坐を其神即天鈿女命ゝて御在ゝ坐せゞ此ゝ御鎮座の御事御在ゝ坐ゝ大ゝ御幽契の有る御事と所見たゝ然るゝ傳十九五百十六丁ゝ注るゝ如く神名式武藏國足立郡多氣比賣神社を風土記ゝ多磨郡稲直郷多氣比咩神社所祭栲幡千ニ姫命也と有し(其比)多氣郡ゝ御在ゝ坐ゝ

らの御事と聞え又阿波國名方郡天石門別八倉比
賣神社大月次新嘗と有と同國神名帳在名東郡佐那河内
村称天磐戸別神社と云る佐那は本國伊勢の地名か
るを以て此地に就ては少縁ありしき所以なる事
をも明らむ可くるむ有ける但此は先と為むし後と
為むし事は同しき物ら
此度の御天降は狭長田五十鈴川上と差給へる
を以て先なる所以とは數ふへうるなり備此神は手
カ雄神の御女に坐す由は傳十九卷二百五十二丁三
百五十九丁に注るが如く其猿田彦神の本名味
耜高彦根神の后天御梶日女命亦名天津羽二神と
御兄弟の御由縁御在坐す御事なりを其神の妻神
と成給へる由に云ふとい甚し然しかは此に遂以侍送
き辭事にて云ふも足ずむ
焉と有は皇祖天神の詔命に依て天八達之衢に伊

勢に侍送らせ給へるなり古事記に汝送奉と有は皇
御孫尊の詔命に依て後に日向に伊勢に送奉らせ
給へるに有ける然るを御紀なりと其記なりと彼
も人も一に心得る事なれども互に各其所方の略ら
りて傳へるめにて例其委しき由は傳卅一九百二十七丁に
注るが如く此正書に到於吾田長屋笠狭之碕矣其地
有一人自号事勝國勝長狭皇孫問曰國在耶以不對曰
此焉有國請任意遊之故皇孫就而留住と見えたる此
傳には猿田彦神の名無くして事勝國勝長狭神にて
傳へるなるか已に此吾田の地を避て伊勢に退ら

せ給ふ御時の事是なり第二一書ニハ乃召國主事勝
國勝長狹而訪之對曰是有國也取捨隨勅時皇孫因立
宮殿是焉遊息ニ有リ（第四ニ書ル大旨）右ニ同ジ此第六一書ニハ右の
事を記されたり次ニ又問曰其於秀起浪穂之上ニ起ニハ
尋殿而手玉玲瓏織紝之少女者是誰之子女耶答曰大
山祇神之女等大号磐長姫少号木花開耶姫亦号豊吾
田津姫云々皇孫因幸云々と有り其事勝國勝長狹神
ニ問ハせ給へるなり因幸と有り其神ニ就て幸させ
御在り坐すなり此御事も傳世一九百四十八丁ニ注せる如
くにて猿田彦神の御功の大ニ御在り坐て天神御子

の御為ニ御功の大なる事此を以て見奉り知べし此
猿田彦神ニ事勝國勝長狹神ニハ正しく一神ニて渡
らせ給へる確證を得たり上り思ふニ其猿田彦神
と申す御上ニて啓行の御功大なりとは雖も若其御
事のみなるむニハ前駈神の扶助と成らせ給へるが
御功なりを此二神の一体なる上ハ皇御孫尊ハ日向
ニ皇太神ハ伊勢ニと其地を預てトさせ給へる御事
も知られ又初國所知食す大宮處より始て后神の御
上ニ至るまで万ニ後見奉らせ給へる御功を合す時
ハ實ニ甚端無く廣大なる御功にて其御尾前ニ仕奉

らせ給へる御事の實も知られ奉りて尊しかど聞え
させむと中しかる御事かとりは有けれ故古事記に
皇御孫尊の大命以て天鈿女命に汝送奉と有に此御
時に在とは云なり然る時は其御天降の時に天鈿女
命は猿田彦神と共に伊勢に到給ひ猿田彦神は本よ
りの本國は日向なりし故に皇太神の御璽を供奉り
て天鈿女命と共に日向に還給ひ其國を天神御子に
奉置して其は伊勢を以て住處と爲させ給へる
にて上二百六十九丁に注る伊賀風土記に猿田彦神始此國
屬伊勢加佐波夜國時二十四万歲知此國矣と有も其

時々の事を所見たりける記傳十六卷二丁に云
何處へ往坐とも云ずして唯送奉と有は其本郷に還
給ふる可し是に依て見れば伊勢は初より其本國
なりけり若て天宇受賣命の送りしは書紀の趣は彼
御前に立て天降給ふ時の如く聞ゆれども此記
の趣は然に非ず猿田毘古神は先伊勢に降著て備伊
勢一度日向宮に朝參て借暇を賜りて日向に
伊勢に還給ふ時の事と聞えたり云々と云れたる
紀記の上に於て互に一は省りて傳つる故に然
異説に見ゆる事に○考漏されたり
注るに如く猿田彦神を伊勢に送奉りして此は日向
宮に仕奉らせざるが故に天鈿女命をして其神の仕
奉る事を相兼て令仕奉給へる較略なり古事記には
此立御前所仕奉猿田毘古神者專所顯申之汝送奉亦

其神御名者汝負仕奉是以稚女君等負其稚田毘古之
男神名而女呼稚女君之事是也〻見元なる先其事を
此ハ一應注して次ハ此の説ハ及ふ可らす汝送奉の
説ハ右ハ注るが如く亦其ハ天細女命ハ送奉らする
時ハ還來りて仕奉らせ給ふ方を此時ハ仰含めさせ
給へる(其神御名者)汝負仕奉ハ記傳十六三十ハ凡て名を負と
云ハ佗人の名ハ在し物名ハ在し取て己が名ハ著を
云ふ其名を負持つ由なり」とそれし如くして其一二
例を云ハ正書ハ謂ゆる稲背脛命ハ天夷鳥命の御
事なるを當須避不〻宜て終ハ大己貴神ハ此國を避

奉しめ給へる故ハ神名式ハ出雲國出雲郡大穴持伊
那西波伎神社と有し其功ハ依て其御名を負持し坐
る なり又其神賀詞ハ己命兒天夷鳥命ハ布都怒志命
ハ副天降遣天荒布留神等ハ撥平氣國作之大神毛媚
鎮天大八島國現事顯事令事避支乃大穴持命乃申給
久皇御孫命乃静坐ハ大倭國申天己命和魂ハ八咫鏡
ハ取託天倭大物主櫛瓊玉命登名ハ称天大御和乃神
奈備ハ坐云〻皇孫命能近守神登貢置天八百丹杵築
宮ハ静坐支と有ハ其天穂日命天夷鳥命の功ハ依て
國を避せ奉給ひしなり然して次ハ是ハ親神魯伎神

魯美乃命宣久汝天穗比命波云て登仰賜志次乃隨ふ
供齋仕奉ㄊ朝日乃豊榮登ふ神乃礼自利臣能礼自登
御禱乃神宝献良久奏て有る神乃礼自利とい其時大
己貴ㄑ神宝を天神御子ふ奉らせ給へるあらが臣
能礼自とい其大神の例の任ふ仕奉れるふて此い其
御名を負持ㄊ云例ふい非れども其神事を負持て仕
奉れるふて御名を負ㄊ云ふ異るるるるざるるる此い殊
あぐㄑ景行天皇二十五年御紀日本武尊の川上梟帥
を刺給ふ所より川上梟帥啓曰之曰汝尊誰人也云ㄑ吾
是國中之強力者也是以當時諸人不勝我之威力而無
不従者吾多遇武力矣未有若皇子者是以賤ニ陋口以
奉尊号若聽乎曰聽之即啓曰自今以後号皇子應称日
本武皇子言詑乃通胸而殺之故至于今称ニ日本武尊

是其縁也ㄊ有ふども仕奉ふ其猿田彦神の仕奉らせ
其例ふ負へつ可し給へる御名を負てるるる記傳ふ仕奉るい皇朝ふ仕奉
ふて即後まで有る猨女の職是るる偖此い猨田毘古
神躬ㄑㄑ皇朝ふ侍て仕奉給ふ可きㄊ此神ふ幽契
有て罷退さて伊勢ふ坐べきる故ふ宇受賣命の此神
の代ㄊ為て其御名を負持て仕奉れて詔ふるる近世
ふ身の代を名代ㄊ云ふ此義ふ允當れり汝負其神御
名ㄊい云ずして其神御名者汝負仕奉ㄊ有る語勢ふ
心を著て能味ふ可し其神の代ふい汝仕奉れㄊ詔ふ
意自含ㄑㄑ猨女君等此い後の猨女君氏の人等を指

て云り男神ハ名を負てといハ猿田彦神の代と爲て其
御名を負む者ハ男ふる可き事ふる小然ハ非で宇受
賣命ふりして後まで皆女ふして其職小仕奉る故
小女ふして男の代を供奉ると云意ふて男神といハ斷
ハしるふ次小女と有と相應へる言ヲ取と云れた
り但此小亦其神御名者汝負仕奉その大命見元次小
負其猿田比古之男神名而と有と思ふ小後世の猿女
君の事ハ格別ふして此時天鈿女命小猿田毘古之女
神と云名ハ負坐るふて其名と云ハ高橋氏文小大倭
國者以行事負名國奈利と有が如く其行事を以て仕奉

（要）

（通證ふし其文を引て今按ふ家或光尊新婦興者名桂女出自山城風土記曰桂里云或有用偏者此乃源氏談榮花談所謂阿麻加都而今所謂這子亦此貴也阿麻加都目勝之義佐女亦蓋取于此也と云れ和訓祭小阿麻加都奉雨乞小天兒を訓り義鈿女命より出たる故事ふり列仙傳小見えたる東王公の摸像と天倪と訓ふり誤れりと云れたるハ實小然る言なり）

を云事ふりけれハ猿田彦神の皇朝小在て仕奉給ふ
行事小代りて仕奉る事を負名といハ云ふりけるふ和
谷重遠說小至今世女御入内有先乘御車者此傳鈿女
命之故實也士大夫婚礼亦有此遺風焉と云る若受る
所有ふるむふハ實小是ヲ猿田彦神の行事を以負持
せる遺風小ハ有べふりける然れハ女呼猿女君之事
是也と云ハ猿田彦神の猿を取て猿女君の号出來れ
る者の如く見ゆふ然れども其鈿女命の子孫の猿
君ハ女ふして其猿田彦神の物爲給へる行事を以て
仕奉ると云まで傳ふり〳〵むを猿田彦神を佐流

（天）（猿女）（と申す男神）（ふして本書紀）

陀と訓成し奉る頃よりの説ふるかや然るハ傳十九三百七十一丁ニ三百七十九丁ニ注るが如く天鈿女命已ニ天石窟の前ニして巧作俳優と云事の有ハ後世ニ謂ゆる猿樂の起原ふるを思へハ猿女ハ戯女ニして全く天鈿女命より以降兼來る其氏人の行事ニ因しる者ふけれハ猿田彦神ニ所以有ニハ非すして其職掌の中ニ其猨田彦神の名代と為て負持仕奉る行事ハ有ふけり然も非すしてハ上三百四丁ニ注るが如く猨田毘古神と作しなる猨田猿田共ニ佐陀と唱奉る事ふるニ猨女ハ佐賣と訓へざる如何とふ云む此ハ甚古くころ誤來る事ふけり

〇汝宜以所顯神名爲姓氏ハ右ニ擧たる古事記

〇又和訓聚ニ禁裡ニ阿祢ハ都と言ふ事ハ見えし行事ニ見えし江次第ニ阿祢茂都と書しこれる事ふるを思ふ其事ハ下三百十丁ニ注せる古事記ニ是以御世しる島之速數献之時給猨女君等ハ有る所ニ云へり

ニニ故ニ詔天宇受賣命此立御前所仕奉猨田毘古神專所顯申之汝送奉亦其神御名者汝負仕奉と有ニ當しる所ふり其所顯神名ハ上ニ猿田彦神の言ニ因曰發顯我者汝也と有る此事を此ニ詔給へるふり宜爲姓名ハ此時未臣下ニ姓氏を賜ハる時ニ非りけしハ古事記ニ汝負仕奉と云ふ古傳の當昔の時世の風ニ取れなりし者ところハ思しりけし拾遺ニハ細書ニして天鈿女命者是猿女君遠祖以所顯神名爲氏姓今彼氏男女皆号爲猿女君此縁也と有て注文の如くふるを思ふ此と其類少て後より書加へられたる者

ふる可し然るハ御紀ニ賜姓と云事ハ垂仁天皇二十三年ニ敦賀湯河枝舉則賜姓而曰鳥取造と有り是始ふる其三十二年ニ天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任土部職因改本姓謂土部臣と有と見れば此以前に姓氏を賜ふ事ハ有と雖も神代ニ係て云む

ハ餘ふる事共ふる此文を引て記傳十六巻四丁ニ此意の主と有る所を失へり此記と合せて曉る可し且此文ニハ心得ぬ事有り先上ニハ姓氏と云て下ニハ姓氏と云ふ忽違へり抑此時未姓氏と云事有べくも非れば此二字ハ此ニ叶ハず只号と有る宜しき云ふと云れき○因賜猿女君之號ハ古事記ニ女呼猨女君と有る是ふる此ニ一の疑有り上二百十九丁ニ注るが如く

此天鈿女命等ハ謂ゆる五部神ニして各其部を帥て天降坐しゝば天兒屋命ハ中臣の部の長ふるニ依て其子孫中臣連と成り太玉命ハ忌部の長ふるが故ニ其子孫忌部首ふると同ト狀ニて天鈿女命も猿女の長と爲て仕奉られし故ニ永く猿女君の祖と坐るニれば高天原ふる猿女成る部を領て降給ひしを此時ふる名を改て猿女君と爲させ給ひし者とも見えざりければ此ニ至りて賜猿女君之号と云事ハ甚しく心得難き事ふりければ右件ニ主るが如く其謂ゆる天鈿女命の女ニて仕奉られし如く猨田毘古之男神の名を負持して其裔孫の猿女君と

天鈿女命より兼傳へて仕奉るが故に其事を上に及して此に始めて其号を賜へりしを者の如く傳へたりし者ふとふこゝろ拾遺に以所顕神名爲氏姓と云事有りしとて神代を去て後の事を其古に係たりし者に信しくこゝろ思ふ所りけり

○猿女君の猿女の氏

り君い姓なり然して猿女の部を領ねて其長なるが故に君と云なり然るに此下に故猿女君等男女皆呼爲君と云ハ心得ぬ事なり若くハ右に天鈿女命に賜猿女君之号と有に依て其子孫に至るまで男女共に皆呼て猿女君と云ふなりけむを姓の君をしも尊称の如く云如く聞えて甚如何なる事とぞ所思えたり然りしば拾遺に今彼氏男女皆号爲猿女君と有る方なむ勝れるを其も古事記に是以猨女君等負其猨田毘古之男神名而女呼猨女君と有ハハ如ざるなり然るハ記傳十六四丁に女呼猨女君ハ此ハ女にして男神の名を負て仕奉る所以を云所なる故に男に用ハ無く唯女を主にハ云り猨と云ハ男神の名なるを女の負て猿女と云なり」と云れたる如くにして男女に亘る可き理無しばなり但負名と云ハ事が思ふ所少う異なるが故に其記を引て右三百三十四丁に注る如く名と云ハ其男神の行事なるを其猨女氏の人女にして其行

事を兼継ぐ故ニ男をハ云ず女を指て猿女君と呼と云事ニして猿田彦神の猿と猿女君の猿とハ相預らざる事ニて其職号の起る所以ハ石窟戸の時ニ在ガ故ニ御天降の所ニも此ニハ猿女上祖天鈿女命古事記ニハ天宇受賣命猨女君等之祖ニ有て其部の長ニして降給へる故ニ五部神の第三ニて坐ス思混ふる事勿れ備此天鈿女命と聞えさするハ天児屋命の后栲幡千ニ姫命の御事ニて渡らせ給へれハ其子孫として殊更ニ在べきニ非す然るを弘仁私記序ニ有舎人姓稗田名阿礼天鈿女命之後也為人謹恪聞見聰慧と云事ニ有ニ

就て載人中臣の所属ニ中臣稗田連と云有りと云り然る時ハ其天児屋命の流れ猿女を女君として仕奉る一家別ニ支れて其氏ニ職ニ就て女ハ猿女君ニの姓を呼ふ事なれ男の限ハ稗田連なりけるを其猿女君と奉る家なれ故ニ男ハ右の如く他姓を称る事ニて有れ故ニ女を外祖の方を主ニして事ニ為る家なれ故ニ天鈿女命をハ祖神ハ持齋けく平ニ為る家なれ故ニ天鈿女命をハ祖神ハ持齋けく例ふるもて有べきけ然云故ニ記傳ニ書紀ニ依れハ此号ハ即宇受賣命ニ賜へる号ニして其を後まで傳なれ者なり但此宇受賣命ハ女神なれニ子孫の有む事疑ハ故思ふニ此等ハ尋常の姓の如く必も其子孫ニハ非れども此職業を相嗣て仕奉る

女等を猿女君と云て此神を祖神と爲るふや有む書紀應神天皇御巻ふ百濟王貢縫衣工女曰眞毛都是今呉縫衣始祖也と有ふども同ト例ふるふや有む然れハ此記書紀を始めて世〻の史共ふ猨女君と云姓の人と見元たる事無く天武天皇の御世ふ其同列の中臣忌部玉祖ふどの氏〻ハ皆姓を賜れる中ふも見元ず又姓氏録ふ見元ざると然る故由ふもや有む取こ要と有ふ起されたる說ふり但其職業を(後の歌を見て)(天鈿女命の云)伀氏の人を以て仕奉る事と思ハれしハ非ふり其猿女君ふ仕奉る可き氏族の有けるを男ハ伀氏ふて其猿女君ふハ女の

(然る時ハ禊田河礼ハ正しく中臣禊田連ふりけ也ハ記傳二巻ふ禊田筋〻書きたるも謂れなる事ふ)

(るとも玉田の古史徵ふ其ノとハ〻〻万葉三巻ふ出たる志賀女姫ふど引用たるハ笑ふふ堪こる事ふ立ふ)

こふて仕奉る氏族の有る事をハ思漏されたるふり然るハ皇太神宮儀式帳ふ大物忌と云職掌ふ有る此ハ女を以仕奉れしるを其少女の爲ふ大物忌父と云有て其父ふハ在れども其女の仕奉る職掌ふハ預ら(ざる)ふ於るが如くふて(ハ)有べき(今も神社ふ依ては巫女ふ仕奉る家の)在て男子ハ(伀)其神事ふハ預らず(伀の職を爲)女ハ家の主ふして其神ふ仕奉れしるが如くふて古ふ猨女君の仕奉る家し必其狀ふりけむ事云も更ふり偖此猨女君の世〻仕奉れしり事跡ハ記傳ふ引れたる拾遺檀原朝段ふ中臣齋部二氏俱掌祠祀之職猨女君氏供神樂之事自餘諸氏各有其職也と見元天孫本紀同天皇即位元年の事と

云る中ニ十一月丙子朔庚寅初齋瑞宝奉爲帝后鎮祭
御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣中略凡厥鎮祭之
日猿女君等舉其言大謂一二三四五六七八九十而神
樂歌儛下略と云る其事を天皇本紀ニ其鎮祭迎日着猿
女君等率百歌女舉其言本而神樂歌儛ハ是其縁者矣
と見えたる百歌女ハ猿女ニて其猿女君の率る部是
なり拾遺ニ凡鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡然則御巫
之職應任舊氏而今所選不論伊氏所遺九也と所見た
りけれハ猿女氏なり大御巫の職ニ仕奉り鎮魂祭の
儀ニ天鈿女命の迹の任ニ依て仕奉りし事ニて男

子なりし者ハ預らざりし證是なり臨時祭式ニ凡御
巫御門生巫巫島巫各一人其中宮東宮唯有御巫各一人取庶女堪事充之
祖考選准散事宮人と有て御巫を奉る事猿女の旧氏
ニ復さしずと雖も猿女君の例ニ依て女を以仕奉る
事ニて男ニ猿女君と云ハ無き事を徴すニ足りし此
なりハ猿女君のこトニて仕奉る可き神事おゝ御巫
猿女と相並ぶ事と成りし故鎮魂祭儀ニ縫殿寮率猿
女升自東側階就座とし御巫舞訖次諸御巫猿女舞畢
と有て猿女ハ御巫の被官ニ如く成りしハ故實と已
ニ失へりと云べし又大嘗祭儀ニ大臣一人率中臣忌

部猿女前行大臣在中央中臣忌部在左右大嘗祭式ニ大臣若大中納言一人率中臣忌部中臣忌部立左御巫猿女左右前行ト有リ後ニハ平戸記ニ仁治三年十一月十三日今夜大嘗祭也云々祭祀之間又多違例等云々無猿女云々希代勝事也ト云ヘリ至リテハ衰ヘ果タル事ヲ以テ薩戒記應永廿三年十一月十三日壬寅今夜鎮魂祭也ト云ル件ニハ猿女君ノ仕奉ル事ノ見元ザルハ終ニ絶竟タル者ト見元テ措ムカモ餘有ル事共ヲ備又大祓ノ時ノ二季御贖儀ニ中臣棒御麻云々中臣輔氏女堪於殿上轉取供奉ト見元タルハ祓ニハ中臣氏ノ仕奉ル事ニ

レドモ女ノ仕奉ル事物ニ見元ズ又猿女君ノ仕奉ル（元ハ中臣禊田連ヨリ出ル）ト云事ヽ見當ラザレドモ其有狀ニ於テハ女猿女君ノ職ヲリツラむを其氏の衰ヘ（ニ隨ひて他の中臣諸氏の中ヽ）ニ中臣女ノ仕奉ル例トハ成ルニ非ル然シハ此一事をバ廣成宿祢さしたりし者と思ひしの所遺と云る中ニ員まへ遺の職掌の較略ニ就テ右の一二を記傳の中ヽ少ク摘出たるのミ其委しき又拾遺ニ天照太神本與帝同事ハ講義ニ就テ見べし

殿故供奉之儀君神一体ハ始自天上中臣齋部二氏相副奉禱日神猿女之祖亦解神怒然則三氏之職不可相離而今伊勢宮司獨任中臣氏不預二氏所遺三也又凡造大幣者亦須依神代之職云々然則神祇官神部可有中臣

齋部猿女云ヽ等氏而今唯有中臣齋部等二三氏自餘
諸氏不預考選神裔亡散其葉將絶所遺十也ヽ有ル然
ルヽども猿女君ハ女こゝろハ仕奉ル男の仕奉ヽ云ハ前
後ハ徴無ルヽ恐らくハ強事ハてゞ有べき又類史ハ
出たる事ハて類聚三代格ハ載る弘仁四年十月太政
官符ハ應貢猨女事右得従四位下左中辨兼攝津守ハ
野朝臣野主等解�ハ猨女之興國史詳矣其後不絶今猶
現在又猨女養田在近江國和迩村山城國小野郷今ハ
野臣和迩部臣等既非其氏被供熟搜猨女事緒上件両氏貪
人利田不顧恥辱拙吏相容無加督察也乱神事於先代

織氏族於後裔積日經年恐成旧貫望請令所司嚴加捉
搦斷用非氏然則祭礼無濫家門得正謹請官裁者搜撿
舊記所陳有實右大臣宣奉勅宜改正之者仍両氏猨
女従停廢定猨女君之氏一人進縫殿寮隨闕即補以為
恒例ヽ見元たルヽ（此事類史ハ被載たり此を以て見）ルヽバ其氏人の近江ハ在ルヽ
ハ高島郡水尾神社二座（名神大月大）並（月次新嘗）ヽ有ヽ頭注ハ彼郡
内（有）大河件ハ河南水尾猿田彦神名河内社河北天鈿女
神也両社分水尾川勸請也ヽ有ハ決く猿女君の氏社
ふる可ヽ其氏人ヽ猿田彦神をも祖神ヽ共ハ並べ
て祀る事ハヽも上件ハ云る如く其猿田彦神の仕奉

られし行事をハ此猿女君の負持て仕奉るが故ふる可き事云と更ふる近江國の内ふて月次新嘗ふ預ら せ給へるハ當社のミふるも甚しき御事とハ見え たり續紀ふ桓武天皇延暦三年八月壬寅叙近江國高島郡三尾神従五位下と有ハ迄都の御事御在し坐ふ依らせ給へるが此ハ啓行神ふ御在し坐を以ての御政と見えて古例を亡ハせ給ハさる甚愛たき御事ふり三代實録ふ貞觀五年閏六月廿七日戊子授近江國正五位下三尾神従四位下を所見たり備其和迄村と云ハ元亨釋書釋法勢傳ふ兼和八年過近州比良山下

(廿)和迄村と有て比良明神と託と云ふ妄説を載たり此を以て其地を証す可し其比良明神ハ謂ゆる白鬚社ふして神祇正宗ふ打嵐(ウチオロシ)白鬚大明神者猿田彦命也と書せしハ其打嵐の地古の和迄村ふ事を知べし

日本風土記と云物ふも白鬚社比良明神同在志賀郡境打下祭神一座猿田彦神と有り三代實録ふ貞觀七年正月十八日庚子授近江國元位比良神従四位下と見えて此白鬚社ハ式外ふるが水尾神社ふ移して其和迄村の(の)ふ祀しる又ハ猿田彦神の木其社ふ坐を以て和迄村の地猿女の養田とハ成しる

ふ猶能考ふ可き事ふり又神名式ふ伊香郡賣比多神社古本ふハ比賣多と作りと云り此事次ふ見合す可

又西宮記ふ猿女依縫殿寮解と有ふ裏書ふ貢猿女事弘仁四年十月廿八日猿女公氏之女一人進縫殿寮内侍奏補之延喜廿年十月十四日昨尚

侍令奏縫殿寮申以稗田福貞子請爲稗田海子死闕云
ニ天暦九年正月廿五日右大臣令奏縫殿寮申被給官
符於大和近江國氏人令差進猿女三人死闕替云〻と
有る弘仁四年十月廿八日猨女公氏之女一人進縫殿
寮と有ハ右ハ引る同年同月の官符ハ定猨女公氏之
女一人進縫殿寮云〻と有る是ハ然るを稗田海子
が死闕を稗田福貞子を以て被補たるハ世〻其氏よ
り貢進る事と所見たり右の官符ハ望請令所司厳加
捉搦断用非氏と有る後の事ありけれバ佗氏を以て
令仕奉らる可きハ非す且右ハ引る弘仁私記序ハ稗

田阿礼を天鈿女命之後也と有を以るハ稗田氏ハ其
猿女の氏人ふるが男の限ハ其職ハ仕奉らざれバ稗
田ハて其女を以て猿女公の氏姓を負る者ふりけり偖
大和國氏人と云ハ所見無し強て思ふハ神名式の添
上郡賣太神社を考證ハ在稗田村今称三社明神と有
る賣太ハ右ハ引る近江國ふるハと比賣多と云と唱
同じきハ官符ハ謂ゆる猨女養田の義ふる可し此ハ
就て春日社記ハ榎本殿臣勢姫大明神と有をハ社記
ハ福擁主榎本大明神所謂女神号臣勢姫大明神と見
元たるハ諸神記ハ榎本明神女神也号臣勢姫明神一

書曰椹本社者猿田彦椹津姫命也と云る椹津姫命更
ふ由無し天鈿女命なる可し其臣勢姫と申すハ式ふ
高市郡巨勢山坐石掠孫神社此ハ天石門別神ふ坐せ
て天鈿女命ふ由有れハ其ゝ此ふ女神のゝを此ふ
勸請る故の名ふめり古の皇都多くハ其辺ふ在ける
頃猿女君ハ其巨勢ふ住けむを都を平城ふ迄させ給
ふ時ふ右ふ謂ゆる稗田村ふ移住けむゝ其祖神の
社を此ふハ祀奉れるふて同神ふハ坐せゝも春日本
社相殿の比賣神とハ其祀る所由別ある者なり又社
記ふ椿本角振明神ふ社記ふ中院乾方脇戸本椿本明

神是也と有る是ふ相殿比賣神榜幡千ニ姫命亦名天
鈿女命の所以ふ就て中院ふハ御在し坐ある可き其
椿木本明神と聞ゆるハ式ふ伊勢國鈴鹿郡椿大神社の
大ハ決く太を誤れるふて其太ハ本字の有文ふて太
とハ別なり此社一宮記ふ猿田彦神と云るふ台記別
記久安六年正月六日條ふ自今日五箇日奉幣帛於東
三條角振隼神社と有ハ女御女内の御事ふ就てなり
其十月十七日條ふ奉拜隼神奉幣七箇日時料紙祠官陸奥
鼻節神社同神也と有る上ふ合するふ角振隼神と有
し一神を脱せるなり即式の宮城郡鼻節神社名大神の

御事あるを風土記に所祭多カ雄神也と有ハ傳の誤れるにて決く猿田彦神なる可き（鼻）ハ節と申す神名にても知られたる右の如くハ単神と同社に坐して天鈿女命に八坐ばら隼ハ鳥名なると同言なるが注式日吉末社の早尾社を猿田彦神と云る如く天鈿女命の強捍猛固なる謂を以て申すなる可し右三百三十四丁に云る（×）女御入内の先乗御車又天兒（アマカツ）の事にも思合せて猿女君の所以なるべし事と察らむ可き御事なるに

こゝ然しい天鈿女命ハ猿田彦神の行事を負持せ御在し坐が為に其子孫の猿女君ハ祖神の如く持齋く事と見えたり傳サ一巻四百五十六丁に注る如く彼平國の經津主神武甕槌神二柱ハ天

兒屋命の見顕ハ給へる神に坐る故に香取鹿島ハ更なり春日枚岡なども何れの社にて右の三神ハ並び坐る例なるに続紀に香取鹿島を其天兒屋命の子孫なる藤原氏の氏神と云事の有と猿女君の猿田彦神と氏神の如く祭来る例と同じ（ぬ）可き事共なり又式に丹波國桑田郡禅田野神社今禅田村に坐と云り猿女君の祖神なるべくや

古事記曰故其後田毘古神坐阿邪訶（此三字以音地名）時為漁而於比良夫貝（自比至天以音）其手見咋合而沈溺海鹽故其沈居之時名謂底度久御魂（度久二字以音）其海水之都夫多都時名謂都夫多都御魂（自都下四字以音）其阿和佐久時名謂阿和佐久御魂（自阿至久以音）

此ハ猿田彦神伊勢に御在し坐し程其或時に在し故事なり備鰭廣物鰭狭物の類ハ〳〵四神出生章第十

一ノ一書ニ見えたる如く其始保食神の御身より成出
たりしを者ハして于時天照大神喜之曰是物者則顯見
蒼生可食而活之也と詔給へりし其中の一種ありけ
れバ實ハ人の食物と成て身を終るハ即其物共ハ備
ハれる皇祖天神の道ある事云も更ニ然れども石
根木立青水沫ハ至るまで言語ひける時ハ彼者共の
中ハ甚く荒振るが多りしと見えて此ども以前
の事ハて已ハ傳サ九十ハ注るが如く紀伊國日高
郡川上莊下愛宕社の建保縁起ハ海月行く國漂ふ
大男汝世を治給ひし時古志の片道七日行く船泊無

〈熊野神吾神泊作らむと思食て杵舂神が白給ハく〉

れば此神泊を作らむと思食て宮を出て其所ハ御在
しを坐て作給へと書作給へバ夜頽れ七日の其程三度
作給へども作固め敢ず杵舂宮ハ還給ひて諸神ハ告
て宜ハく我彼〈泊〉漆作るハ若ハ三日若ハ七日又ハ一月
若ハ半年若ハ一年の間ハ作る可し三年ハ成まで見
元ずハ必問給へとて宮出して伴泊ハ御在し坐て作
給ふ程ハ泊の中ハ籠の舟を作て坐すハ大鰐出來て
舟ふゞ〻呑奉りて三年ハ成ぬ時ハ杵舂神の思食給
ハく熊野神三年ハ成れども見えず吾問給へと云し
者をと思食し出給ひて軍武男阿須加大明神と彼泊

に率ゐて御覧し給ふに大鰐の為に呑れ給ひて海底
に比岐御在し坐せば杵喬神少時思し歎給ふに（阿須杵喬）
賀神の申給ふやう如何に悩給ふ事有む我斬出し奉
らむとて潮押分て外より阿須賀神斬給へば内より
熊野神斬給ふ云々と云事の有は荒唐に近き事なが
ら當昔然る鱗属に至るまで荒びたりし狀は知られ
たり此に猿田彦神の貝津物の為に御手を咋合され
させ給ひて海中に沈ませ給へるも必右の類なる事
にて經津主神武甕槌神の平國にも然る魚物などの
事に交はせさりしうち邂逅斯る事は有し者とぞ

見えたりける此次に舉る文に天鈿女命の大小雑魚
を召集めて天神御子の御贄に仕奉るや否と問給へ
るも斯る事ゝ有しが故ある事云々更ふる者なり
し然て此猿田彦神はしも上件云るが如く
事代主神に御在し坐て上文に射鳥遨遊在三津之
碕などに有て此漁猟の事には勝れさせ給へる神なれ
ども斯る事有り況て其余の人ふとには魚貝と雖も
取る事の甚難うけ〇阿邪訶は漁處（アサリカ）なり其事は次
む程想像る可なり
の為漁の下に云べし記傳十六ハ下に阿邪訶は伊勢國
壹志郡なり太神宮儀式帳に次壹志藤方片樋宮坐只
其在阿佐鹿忌神平驛使阿倍大稲彦命即御共仕奉支
彼時壹志縣造等（建部）遣皆子（子）汝國名何問賜支白久宍往

皆鹿國止白只即神御田并神戸進支ニ有り皆ハ字書
ホ毀也とも注セレバ鯨の意ホ取て書るり又璽異記
ホ皆を阿邪邪流と訓り此意り又和名抄郷名の皆部
ハ安多ニ有り參河國ホも皆見てふ郷有れど其ホハ
注無し神鳳抄ホ壹志郡大阿射賀御厨彼是廿六石小
元結廿疋
阿射賀御厨世三所八段十五石又小阿射賀神田町ニ有り今も
大阿坂ホ阿坂と北南ホ並びて二村有り松坂より一
里半許西方あり其山をも阿坂山と云ふ取要と云れた
り右の実行ハ發詔ホて鹿シの行く物を求アサ食る義の續
けと見め備此地今ハ海邊とハ遠く隔在れしども古

ハ元て入海なりし狩ケれバ猿田彦神常ホ此所
を漁アサリス為る處ホ成し給へりしホ依れる地名ホる可し
倭姫命世記ホ然度坐時ニ阿佐加加多ホ多氣連等祖
宇加乃日子之子吉志比女次吉彦二人參相奉支此間
給ヘ之汝等我阿佐留物者奈ホ曾止問給支答白久皇太
神之御贄之坏奉上伎佐宇阿佐留止白支于時白事恐
止詔而其伎佐天令進太神宮御贄而佐ゝ宇乃木枝乎
割取而生比伎ホ宇氣比伎良世給時ホ其火伎理出而
米女忍比賣我作之天平瓮八十枚持而伊波比戸ホ仕
奉支ホ吉志比女地口御田並麻園進と見えたる此文

に然度坐時に之有を以見れば垂仁天皇の御世頃に
も猶船渡する所ありしなりけり又汝等我阿佐留物
者奈に曾止問給支と有し御船より見行し坐て其漁
為る人に直に詔給へる事云と更なり備猿田彦神の
漁為させ給へると比良夫貝と有り此時のを伎佐宇
と云るハ　蚶貝の事なるを思ふに昔ハ潟なりし處
にて淺海なりしと所見えたり此世記の文に依れば
事に依て始て出来しる地名と思ふ人も有ふめども其伎佐宇阿佐留の故
然に非ず神代よりして其阿佐留と云事を物為し故
に名と成て在しに又此に
倭姫命の故事の有しなり
須那枳理志豆と訓べし和名抄に漁説文云捕魚也訓

（此ところ阿佐加多と云ひ又其）

〈神武天皇戊午年御紀に亦有作梁取魚者トリスルモノ〉

須奈度利〈欽明天皇五年御紀に春夏捕魚充食と見え
万葉四三十五丁に奥辭住辺去伊麻夜為妹吾漁有藻伏束
鮒あど有り師云須那取ハ伊須那取の伊を省き須と
佐とハ通音なれば即鯨魚取なり然れば鯨魚を取を
本にて何の魚取をと云り下略と云れしに然る言なが
ら予が思ふハ沙取にて貝あどを沙あど取に起り
て釣をも網をも為て何れの魚を取るにも及ぶし云
事なるハ聞えたれ備此を貝を取給ふ所ありけれ
ば沙取にて事も無き者なり　右に云る如く此阿邪訶
の地名に依に為漁而ハ阿佐理志豆と訓むに勝れ

〈八小島廻為等磯尓見之花又〉

りける万葉五二十丁小阿佐里須流阿未能古等母等七十五丁小朝入為等磯尓吾見之又十七丁朝入為流海未通女等之又二十二丁入潮為海人鳥屋見鹽多比由久和礼子九十五丁小朝入為流人跡子見座灣廻為流人等波不知尓ゐど見元三代實録天安二年小我耶護毛留田仁耶阿左搜理食無志岐耶そと有り鳥ゐどの食と求むる小云る八万葉小未食(アサル)の字を用ひたるが此八人の漁する狀小比へて云るゐて鳥の求食を本と為るゐゐ非ず備傳世一七百四十一丁櫛八玉命を伊佐我命とも申すゐ就て伊佐理の事を注すそて引る鴨長明無名抄小或人云く阿佐理と云ひ伊佐理と云ハ同事ゐり其ゐ取て朝ゐ為るを阿佐理と号けゐ小為るを伊佐理と云り是東の海人の口狀ゐり云く甚(實ゐ)興有る事ゐり」と記せる を先ゐハ心得ぬ事ゐ思へりしを今考るゐ信ゐ然り其ハ阿佐理ゐ右の如く万葉ゐ朝入と書るゐどを借字と誰しも見る事ゐゐ是正字ゐて漁士ゐどの朝ゐ海ゐ入ゐ由ゐて云る語ゐるが鳥ゐ云と其意味ゐ用ひたるゐ伊佐理ハ夕入(ユフサイリ)ゐて其ゐハ伊佐理火とハ云へども阿佐理火とハ云ざるを以て其然る所以ハ知らしたゐ和訓榮ゐ無名抄ゐ云く万葉ゐ灣廻を阿佐理須流と訓るハ義を以て訓

〈源氏須磨巻ふ伊勢島や潟の潟ふ阿佐理て言甲斐無き故身なりけり〉と有るどふや思ひ寄けむ

せり然れば淺きふ取の義ふらふや十訓抄ふ三井寺の覚讃の哥ふ山川の阿闍梨と成らて沈みぶ深き恨みの名をや流さむ鳥羽院闍食て阿闍梨ふ成されけると見えたりと云れ又或説ふ阿佐理ハ淺きふ取を云ひ伊佐理ハ深きふ取を云と云れと然る義ふ非ず

○比良夫貝ハ平合貝（ヒラアフカヒ）の義ふる可し記傳十六十ふ比良夫貝ハ古世ふ多在し物と思しくて人名ふ負る書紀續紀ふ甚數多見えたり書紀ふ大伴毘羅夫連（夫）巨勢臣比良夫額田部連比羅夫阿曇連比羅夫倭漢直比羅夫河部引田臣比羅夫續紀ふ民忌寸比良夫采女朝臣枚夫田辺史比良夫石川朝臣比良夫ふど有り此等皆此貝を以て号けたりと見ゆ然るふ和名抄ふど ふ見えざるハ後ふ名の変れるふや有む今詳ふらず猶種々思巡らすに今世ふ月日貝と云ふ貝有り殼の狀月日ふ似たり是ふどふや又多比良岐と云ふ貝有り平貝（ヒラカヒ）の意ふて是ふや又佐流煩と云貝有り猿猴らしてふ意ふて此り故事ふ依れるふて是ふや然れど此等皆其名ふ就て思依れる任ふ試ふ云のみなり若て後ふ志摩國の海辺の人ふ此貝の事問けるふ云く比良天貝ハ月日貝の事ふり此辺の海ふ甚稀ふ在る物ふりとぞ云ける猶國々の人ふ尋問ハば今も古名の残れる處も有べきふり今飫高郡の海邊ふ平生と書て平（比良）方と呼ぶ村有り壹

志郡の堺ニ近くして阿坂村より一里半許東なり是
若くハ古ハ比良夫ニて此貝の此の故事より出たる
地名ニハ非るか神鳳抄ニ平生御厨と有る處なりと
云れたる信ニ月日貝ゑびや當る可しかれども但右ニ引
る世記ニ汝等我阿佐留物者奈尓留止問給支答白久
皇太神之御贄之坏奉 上伎佐宇阿佐留止白支と有
る伎佐宇ハ蚶魚と云事なるが出雲風土記ニ佐太大
神ニ對へて御祖神魂命之御子枳佐加比売命と有
ニ由と有けるしども比良夫貝と蚶貝とを一ニ爲む
事ハ有まじきけるこゝろの爲れば猶月日貝の説ニ

従ふ可し何ニ在れ猿田彦神を一時溺らし奉る程の
魅物なりければ彼貝白蛤ゑびの類なる大貝なるしかて甚しく一速ふる荒振神の屬なりし
が然る禍事をば成せるゑびなれば有ける伎佐宇ハ記傳十卷十八丁ニ蚶貝
ハ伎佐賀比と訓べし和名抄ニ蚶唐韻云蚶蛙屬狀如蛤圓而厚外有理縱横即今鮒也雜色立成云和名木佐
ど有り是本草ニ魅蛤と有て今阿加ゝ比ゝと云物なり
出羽國ふる象潟と云地名なり延喜式ニ蚶方と書り
倭姫命世記ニ伎佐宇阿佐留と有し蚶を求るゑやと云
くと云れし如く赤貝の事ニしば比良夫の形を以て
号るとゝ一ニ
い爲難りり○其手見咋合而ハ其両の御手ゑびを咋
合さし給へるなり故其を放たせ難させ給ひて潮ニ
沈溺れさせ給へりゝ見ゆ上ハ高天原を光し下ハ葦
原中國を光すと云計ふて甚しき神ニ坐ゑびを斯る

事ヲ過テ姑クヲテモ惱ませ給ハるハ形ころ魚貝ハ
テハ有けれ其も一速ぶる神の化れるりければ此
神ハ漁ハ心を入て御在し坐す間然を伺ひて如此ハ
化し奉りるふり若くハ其親ら子ら其族らを漁ら
れ奉りし事の有けむを報奉るこての事りけむと
知べくず○沈海鹽ハ記傳十六ノ十ノ齊明天皇御
紀の大御歌ハ弥儺度能于之良能矩娜利干那倶娜梨
と有ハ依て訓べしトふる海水も同じ」と云れき沈鹽
ハ記傳ハ二字引合せて淤煩礼と訓べしと云れたれ
ども字の如く訓べし四神出生章第六一書ハ沈濯於

海底又ハ潛濯於潮中又ハ浮濯於潮上ふと云ふ例の
有れば沈字此ハ用有る所ふれば ○故其沈居於
底之時名ハ如此御名ハ負坐るハ其海底ハ沈し御在
し坐し間良姑く有けるが故ハ其時の御魂別ハ分れ
させ御在し坐て次ぎふる共ハ各一神とハ化出させ
給へるふり若て其分れ給ひし神等ハ其貝すゝ然る
妖物有て惱ませ奉る計ふりければ其余の魚物ハも
邪神姦鬼の著居て禍事を成せりけむを悉くハ防却
ハせ給ふ神ハ出來させ給へるふりけり世ハ事代主
神を漁神と爲て祀るハ唯其事を始給へるのミハ

非ず其漁を爲る上に就ての事に依りて祭るべき事ある可き事此件を以て明らめ奉る可し（此）四神出生章第六に書に至於火神軻遇突智之生也其女伊弉冊尊見焦而化去于時伊弉諾尊恨之曰（中略）其淚墮而爲成是即畝丘樹下所居之神號啼澤女命矣と有へ伊弉冊尊の黄泉國に避らせ御在し坐ける御別を哀しませ給ひて伊弉諾尊の泣給へる御淚より泣澤女命へ化出給ひて即人の壽命を守護る神と成給へるに同じ其御淚を然る御心にて出し給へるに非ずと雖も已に其神有り此も沈溺給ふに（時）然る御心へ御在し坐さゝめども

其苦しませ給へる條の事を守る神等へ出来させ給へりし者（霊の此に）そこらへ所見たりけれへ如此て是時に蔑ひて（ふて御魂を申す例凡て祀り物を祐くる義なること同一義）記傳に沈溺へ此神坐しにやや然に非ずや決め難しと云ふ疑を存されたるへ右の如き所以有る事古書の例として多在る事なるを思漏さしたりし者と見ゆ○底度久御魂へ記傳に底度久へ底著にて底に沈著なり下なる日子穗に手見命の大御歌に加毛度久と有を書紀に軻茂豆句と有る即鴨著なり是度久へ著なる證なり」と云れたるにて明らけし○其海水之都夫多都時へ海潮之粒立時なり鳴音を此に云るなるべし先記傳十六十一に都夫多都へ師説に物の沈没る時に水の鳴音と云れき藤原

實方集ふ物をたゝ岩間の水の都夫〻〻と云ばや行
む思ふ心の千五百番歌合顕昭判詞ふ世俗の口遊
こふ兩降れば軒の玉水都夫〻〻と云ハ〻〻や物を心
行まで万葉十八十二丁ふ可治能於登乃都波良〻〻〻
ふ此も樽の水ふ觸て鳴音ふて都婆ハ都夫ふ同じ今
世の言ふも物の水ふ没ふ沈むを都夫理と入ゐど云
是ゐ又多都と有ふ就て思へば音ふハ非で物の沈
没る時ふ水都煩の發を云ふや水都煩ハ万葉二十五十
二丁願壽作歌ふ美都煩奈須可礼流身魯等波之礼ニ枳
母奈保之祢可比都知等世能伊能乃知子ニ有て水上

ふ圓ふ浮ふ泡ゐ又字治拾遺物語ふ大柑子の膚の
やゐふ都夫支陀知て豊盈れたり此等ニ形を云り然れ
ども此處ハ次ふ阿和佐久と有れば形ふしてハ同じ
事の重ゐれば猶音ゐり略下と云れたり今思ふふ此ハ
音を見ゐりハ形を見ずしてハ叶ハざる可し然し
て物の水中ふ沈没る時ハ都夫〻〻の音有て上ふハ
圓ふゐ泡の浮ふ者ゐりければ形も音ニ相離しざる
言を所見たり其證ハ色葉字類抄ふ載る竹生島縁起
ふ爰淺井姫命興氣吹雄命競勢爭カ更去北辺下坐海
中其下海音去云都夫布都布改云都布夫島即件神凝水沫

△皇太神宮儀式帳未官社の中小都布良神社大水神兒洋布良比古津夫良比賣命形無之有様なり此神しも分ちて雖水の都夫多都小依れる名なり可仲哀天皇八年

○鄙紀小皇后の浦ヲ御在坐

坐けり所なり是浦口有男女二神男神曰大倉主女神曰菟夫羅媛と云事見えたり

而爲磐積風塵而作島と有て音ハ都布しと云て次ハ水沫を云るハ右ハ謂ゆる水都煩ゆると合せて思ふ可き者なり〳〵記傳ハ多都とハ上るを云て烟の立ると皆上るを云ふ底〳〵音の鳴て上るなり」と云れたるか此い音と共水沫ハ底〳〵立て上るを云なり又水中ハ沈没るを都夫理と云も古言なる可〳〵大和物語四巻生田川ふて女の身を投る所ハ此幕ハ川ハ臨て爲なり けれハ都夫理と落入ぬ云こと有り ○都夫多都御魂ハ底ハ著せ給へる即水都煩と共ハ上ハ出させ給いもと爲る御魂の謂なる可〳〵 ○其阿和佐久時ハ記傳十六十一丁ハ阿和佐久ハ沫咲なり佐久ハ花の咲と同〳〵て沫の泡起出るを云ハ師説なり浪の立ともし咲と云ハ同ト書

紀ハ秀起浪穂秀起此云左岐陀呂屢と有り備右の三の形ハ猨田毘古神の御身の底ハ沈著坐るハ依て海水の都夫〳〵と鳴上りて沫の起るなり三件の次第し如此〳〵と云れたり備上なる二ハ八(其)海鹽又ハ海水云〳〵と有と此ハ唯ハ阿和佐久と有〳〵ハ其海水を離れて上の事と思ふ然しハ此ハ避沫(サケルアワヲ)と云義ハて已ハ水上へ出させ給へる時と見る可し然して右の三件ハ猨田彦神其比良夫貝の爲ハ御手を咋合(衍カ)させ給ひて海底ハ沈居給ひ〳〵程ハ底度久御魂と云ふ御魂の成坐て助奉り其海水の都夫多都御魂ハ成(水都煩成せる)

坐て其貝をバ水際まで引上給ひ其水上を離れて沫の縁を避る時ハ阿和佐久御魂と申すが成出坐て此時ハ己ハ其貝を殺し殼を割給へる事と存思ひ居る此三柱ハ猿田彦神の御魂の分れ給へるハ在しでも元て其御魂と申すハ傳世十百丁ハ注るが如く佗ゝ助る者有を云例なりけれバ其大神の自沈溺坐ゝを自御魂の分れ成て助救ひ其禍事を成せる貝を殺ゝ平治げて後世海物の妖邪を攘ふ事と守給ふ神と成給へる者なり然ればそれ猿田彦神の海水ハ沈溺れさせ給ひし時ハ其御魂と云ふ三柱の成坐るなりのゝ見てむハ一時の故事ハて何の事し無き昔物語と成ハ非ずや

○阿和佐久御魂ハ其貝を取殺して水上ハを離避せ給ふ由ふる事右ハ注るが如し○神名式ハ伊勢國壹志郡阿邪加神社並名神大記傳十六十二丁ハ此三の御魂ハ此時の事ハ就て各分れたる猨田毘古神の神璽ふり其三の御魂を齋祀れるなり續後紀ハ美和二年十二月辛未朔甲申奉授阿射賀大神従五位下此神坐伊勢國壹志郡文德天皇實録ハ嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥授伊勢國阿射賀神従五位上齋衡二年正月壬午朔壬寅ハ伊勢國阿射賀神預於名神丙午伊勢國阿邪賀神加従四位下三代實録ハ貞觀元年正月廿七日甲

申奉授伊勢國従四位下阿射加神従四位上同八年十一月四日乙巳伊勢國従四位上阿射加神授従三位と有り今世阿邪訶神社大阿坂村と小阿坂村と二處に在り二方共に俗に龍天社と申すあり同じ程の森に行り共に古く見元神殿と各三宇有り何れの方か古の本なりのあるべし今難辨し小阿坂村ある圓座藥師と云寺の縁起文に小阿坂村ある神社は昔行基僧勸請せる由記せり若是實あらば大阿坂あるや本より の神社ある可き備此阿邪訶神上古に荒ひ坐し事有り倭姫命世記に十八年己酉迄坐于阿佐加藤方片樋

宮積年歴四箇年奉齋是時に阿佐加乃弥尼に坐而伊豆速布留神百往人者五十人死取如此伊豆速布留時に倭姫命於朝廷大若子子進上而彼神事子申之者種々大御手津物彼神進屋波志志豆平奉止詔遣下給支于時其神子阿佐加乃山嶺に社作定而其神子夜波志志都光上奉天勞祀支と見元又一書曰天照太神自美濃國廻到安濃藤方片樋宮座于時安佐賀山有荒神百往人者亡五十人四十往人者亡二十人云々于時阿佐賀荒神悪神爲行子倭姫命遣中臣大鹿島命伊勢大若子命忌部玉櫛命奏聞天皇々々詔云々即賜種々幣而

返遣大若子命祭其神已保平定即社於安佐駕以祭者
矣云々と有る是なり阿邪訶神社は正しく此荒び坐
し神を祀れるを聞えたれば即此の後田毘古神の三
の御魂なる可し此三の御魂神當時未朝廷に祭給
ふ事も無く社なども速やかに滅しし故に崇しし
て諭給ひしなど有けむ彼崇神天皇御世に大物主神
の崇りして疫病も甚しく起りし事なども思合す可し
取と云れしは然る言なれて此時まで三の御魂神共に
要
御社なども無く朝廷よりの御祭なども無りしか
ら崇らせ給へるなこそ有けれ彼殘賊強暴横惡之

神なども本より條理別なる者なりと思混なる事勿
れ筑後風土記に筑後國者不與筑前國合為一國昔此
兩國之間山有峻狹坂往來之人云々昔此堺上有麁
猛神往來之人半生半死其數極多因白人命盡神乎時
筑紫君肥君等占之今筑紫君之祖甕依姬為祝祭之自
尒以降行路之人不被神害是以曰筑紫神と有は神名
式に謂ゆる筑前國御笠郡筑紫神社名神大と有て是
五十猛神に坐り又肥前風土記に基肆郡姬社郡云々
昔者此川之西有荒神行路之人多被殺害半凌半殺于
時卜求崇由兆云々筑前國宗像郡人珂是古今祭神社
云々於是亦織女神即立社祭之自尒以降行路之人不
被殺害因曰姬社今以為鄉名と有り此は宗像神にて
渡らせ給へり此等は何れも善神の御上に坐せど
も其祝祭を得させ給はざる時は右の如き御祟の御
事御在し坐て此等を以て猿田彦神の御魂の此に荒
びさせ給へりし所
以をも察しむ可し

於是送猿田毘古神而還到乃悉追聚鰭廣物鰭狹物以問言

汝者天神御子耶之時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白尓天宇受賣命謂海鼠曰抑也是以御世御世島之速贄獻之云此口子不答之口而以紐小刀拆其口故於今海鼠口拆也是以御世御世島之速贄獻之時給猨女君等也

天鈿女命此小猿田彦神を送ぶせ御在し坐けゝ時小一時猿田彦神阿邪訶小御在し坐て鳥漁給ひけゝ小海中の妖氣未除こゝずして右件三百四十七丁小注るが如く比良夫貝小御手を咋合されさせ給ひてけゝ小底度久御魂都夫多都御魂阿和佐人御魂と云神此小成出させ給ひて其怪物をバ平治させ給へゝ趣ありしど

も其余の魚貝おも然ゝる類の多在けむを見行ハし御在し坐て天鈿女命此御政小ハ及バせ給へゝりけゝり四神出生章第十一一書保食神の件小稲穀ハ更小ゝり毛麁毛柔又鱠廣鱠狭の類其神の身ゝ化出しゝハ天照太神喜之曰是物者則顕見蒼生可食而活之也こ有ゝ大命御在し坐て實小顕見蒼生の食て世小活存ふ可き物をこゝろ定め掟させ給ひしゝ石根木三青水沫も言語ふ程の荒芒たりし國ゝりし程の事小て魚貝と雖も己が恥ゝりけむを此ハ陸地小抱ハしゝる者ゝりしゝ依て經津主武甕槌二神の御治も

此ホハ及バセ給ざりしホ所得て然一速きも中ホハ
有けゝ故此ホ天鈿女命然る大小雑魚を志摩國ホ
悉くホ追聚めさせ御在て坐て神問しホ問し給へりて
否ヲ奉らバ海底ホ及ぶまても言向させ給ハむと爲
る御心御在て坐ガ故ホ有けり若然らずと云ハゞ其
魚共の仕奉らむと申さバこそ有め仕奉らゞと申た
りとて止給へらむホハ皇祖天神ホ天神御子の食
國と爲て事依奉らせ給へる驗無きホ至れるを以て
此時の天鈿女命の御心の程を測奉る可き者ホ（但此
ハ天鈿女命一柱の御心のミホ非ずして預て御天降
の時ホ皇祖天神ゝ仰含させ給へりし御旨ヲ有け

む〻の御事ホる可然ホ諸の魚共悉くホ仕奉ら
き事申すし更ホ誰ホ有ら〻
むと申して雑ゝ背奉る者無く其御命を恐て奉れ
るを海鼠のミ申さゞりし故ホ今斯ホ御政の御罰ホ
ハ遇奉れりけるホ然れバ此ハ甚偽初ホ事の狀
ホハ見ゆれゝ海神ホ相議して然政こゝ世御
在て坐けるホけり海宮遊行章第二一書彦火〻出
見尊釣針を亡ひて海神の御許ホ御在て坐たる所ホ
口女有口疾即急召至探其口者所失之釣鉤立得於是
海神制曰你口女従今以往不得呑　餌又不得預天孫
之饌即以口女魚所以不進御者此其縁也と有を説見

ラハ不得呑餌ト云ハ餌ヲ呑テ人ハ釣ルシガ中ニハ
彼ガ眉目ハ甚シキ事ト見ヱ天神御子ノ御饌ハ人
ノ食用ト成ル事ハ彼ガ本意ト為ル事ハ別見ヱテ
此ヲ人ハ譬ヘテ云ハヾ呑餌ハ食禄ヲ得ルガ如ク饌
ト成ハ勤仕ヲ全ク為ルト等シキ理有ル事ト所見タ
リ是天鈿女命ト海神ト相謀坐テ定サセ給ヘルアル
ムヲ云フ所以ナリ若テ此故事ヲ志摩國ハテノ事ト
云ハ下文ハ御世〻〻島之速贄献之時ト有ハテ著ク
又志摩風土記ハ島者安曇別神ト迹也云〻ト有ル此
神ノ事詳ナラヌヲ古事記ハ此三柱綿津見神者阿曇

連等之祖神以伊都久神也故阿曇連等者其綿津見神
之子宇都志日金拆命之子孫也ト有ハ依ル海神ノ子ト
孫ナルハテ此ハ住給ヘルナラヌムヲモ合セテ此ハ考フ
可キ事ナリ〻〻若テ其風土記ハ答志郡伊佐部鱸數簒
神社事代主命也命得鱸祭天神地祇之地ト有モ猿田
彦神ハ即事代主命ハ坐セバ天鈿女命ノ御事御在〻
坐ケル後ハ其海中ノ治ナリ〻由ヲ以テ其始テ得サ
セ給ヘル海幸ヲ以テ其由ヲ告テ天神地祇ヲ祭ラセ
給ヒケムヲ見テムハ強事ナラヌ〻〻又右ノ島者
安曇別神ト迹也云〻ト有ハ續テ天日方奇日方命至

此舉言云豊志摩魚足三國哉後竟爲國名と見えたる
其天日方奇日方命と聞えさするハ傳三十 百 十 丁 卅
一九百二十九丁上二百七十一丁ニ注るが如く事代主神の御子ニ
坐て猿田彦神の吾田國を皇御孫尊ニ奉置して此ニ
猿田彦神と共ニ伊勢ニ御在て坐る如く見ゆれば此
志摩の地ニ住ハして豊志摩魚足三國哉と云ふ言舉をも爲
くれしふど右件の事共ニ相協ひて思ゆるが上ニ例
と爲て島之速贄を天鈿女命の裔なる猿女君ニ賜ふ
なるふど何方ニ就ても得去すべき謂れ有る事共ニ
ふゝむ有ける然れば此の件をハ天鈿女命ハ魚共
を伏ろへ給ひ猿田彦神ハ其海幸を以て

天神地祇を參給せ給ひ天日方奇日方命ハ此を
魚足る御國と爲て其速贄をば日向宮ニ奉初給へる
者と見て次第宜くうる可し○於是の下ニ天宇受賣命と有べきが
脱たるふる記傳ニ已ニ其説有ハ然る言ふる○還到
ハ記傳十六 十五 丁ニ還字ハ罷と誤れるふる可し麻加
理伊多理氐と訓へ云れしハ然る言ふて其上文
故ニ詔天宇受賣命此立御前所仕奉猿田毘古大神者
專所顯申之汝送奉と有を秉たる所ふれば必然非ず
して通元ざる所ふる又記傳ニ此還到ハ罷到の誤
ふて此くり折其口と云までハ伊勢國ニてのふる事ふる
若本の如く還到ふるバ此段日向ニ還到りて後の事

ゟり若然る時ハ猨田毘古神を送れる事ハ更ニ開
くず縁無き事なれば別ニ端を改めてこゝ記す可け
れ彼神を送れるニ引連けて云るハ送りて伊勢ニ到
て其國ニての事なれば彼其處の志摩の速贄を
献れる時ニ給ふ例とハ成れるゟ」と云れて此ハ
て愈其誤字ある事知られたり○鰭廣物鰭狹物の説
傳十四 三十一丁 ハ注せり○追聚ハ俗ニ追寄ると云ハ同
ト(ク)記傳十六 五丁 ハ魚なる故ニ追と云り魚ハ方ゝ
ゟ追寄せて集ひれば「なれり」と云れなり常陸風土記
ハ于時追集八十伴緒舉此事而訪問ひ有るどい人ハ

云ゟるが朝廷ニ仕奉る人を追集と云べき理無れば
其ハ召集の誤字ある可し○問(ハ)言ハ海宮遊行章ニ
海神乃集大小之魚逼問之と有が如く逼問給へるゟ
め其第一ノ一書ニ於是摠集海魚覔問其鈎第二ノ一書
ニ盡召鰭廣鰭狹而問之古事記ニ海神悉召集海之
大小魚問曰ゟど見元たり○天神御子仕奉耶記傳十
六十六丁 ハ此ハ皇御孫命の天御饌の御贄ニ成ふもや
否やを問ゟり万葉十六 三十丁 為鹿述痛歌ニ安待跡吾
居時ニ佐男鹿乃來立來嘆久頓ニ吾可死王ニ吾仕年
云ゝ吾宍者御奈麻須波夜志吾伎毛母御奈麻須波夜

之吾美義波御塩乃波夜之者奈奴吾身一ニ七重花佐
久八重花生跡白賞尼白賞尼又爲蟹述痛歌ニ忍照八
難波乃小江ニ廬作難麻理ニ居葦河ニ子王召跡何爲
牟ニ吾子召良米夜云く足引乃此片山乃毛武ニ礼子
五百枝波伎垂天光夜日乃異ニ于佐比豆留夜辛碓ニ
舂庭立碓子ニ舂忍光八難波乃小江乃始垂子辛久垂
來ニ陶人乃所作瓶子今日往明日取持來吾目良ニ塩
漆給時賞毛時賞毛と有る此等の御贄ニ成と云り補意
と云れたり備我ヶ天神御子ハ〻〻と拭きく〻も甚も恐
き皇祖天神の御事依を蒙奉らせ給ひて天地の依相

の極く食國天下の大君ニて渡らせ御在〻坐せバ人
ハ更ニも云ず皇祖天神の産靈の御靈ニ依て世中ニ
在と〻有ゆる万物ハ有情非情の差別有る事無く悉
ニ仕奉りて天神御子の御趣を仰従ひ仕奉る可き事
今更ニ言舉るまでニハ非る物〻〻此の一事を以て
も万物皆然る由を明らめ奉るニ足れる者ゑ然れ
バ此ニ魚共を追聚めて天神御子ニ仕奉むやと問せ
給へるも魚物と成てハ日〻の御贄と成り人の食物
と成ゑ彼ゑ天神御子ニ仕奉れるニて稲穀の大御食
ニ炊ゑれて食し奉るニ其義同じき事云も更ゑ故

右三百六十二丁ふ引る海宮遊行章第二一書ふ海神制曰你
口女有口疾従今以後住不得呑餌と有ハ魚を罰して
餌を呑べ〻ずと掟給へるより餌を呑む事能ハざ
る時ハ人ふ釣る〻愁無きふ似たるを魚の為ふハ其
釣鉤ふ羅らざる事を限無き不幸と為る事ふる證是
る〻次ふ不得預天孫之饌とハ此ふ天鈿女命の定さ
せ給へるが如く天神御子の御贄と成て仕奉る事ハ
魚と成て生来れる身の幸ふる事と見えて此ふ罰し
て其御饌ふ預る事勿らしめ給へり然れば魚の心ふ
成てハ人の食物と成て命を終む事草木ふ花の咲て

御食津物を御自慶くさせ給へる御所業

實と成れるふ異ふ〻ずふむ有けるを然る時ハ傳十四
七十五丁ふ注るが如く元正天皇の大御世〻〻以降胡神
を好信せ給ふ御心進びふ天下の漁獵を禁止めさせ
給ふ詔勅を時〻ふ下給へるハ此ふ天鈿女命の掟置
せ〻れしとハ表裡ふる御政ふて皇威の衰させ給ふ
（ふて皇祖天神〻捧奉らせ給ふ）
御端ところハ成ふたりけれ其御主意と申すハ各其
めさせ給ふ御意ふて一應ハ御仁心の如く見えさせ
給ふ物〻其も佛と云物ふ依らせ給ふ〻の御心
ふ御在し坐て眞の御仁心ふて渡らせ給ハず皇祖
天神の御定ふ背らせ給ふとハ思食し寄らせ給ハず
り〻者ふる〻けり眞の御仁心ふて渡らせ給へらむふ
ハ彼魚物を御て大御身の養と成させ給ハむふころ
其御心徳の鳥獣魚貝ふ及バ
せ給ふとも申奉り将欲し備上二百五十六丁天津日継の

△其十七年の下に御膳をば美都岐と訓るゝと殊更に所以有る事なるべし―猶

御事に就て明らめなるべき如く稲穀は本より事に
て日〻の供御の御贄を奉る事とは御貢とも日貢と
も申せり（雄略天皇八年、御紀に苞苴の字を美都岐と訓ミ又出雲神賀詞に白鵠乃生御調能玩物登と有）
は更なり万葉一十九に山神乃奉御調等云〻遊副川
之神毋大御食に仕奉等云〻六十五に御食都國日之
御調等十八二十に山河乎比呂美安都美等多豆麻都
流御調宝波又三十三丁萬調麻都流都可佐等都久里多流
曽能奈里波比乎二十二十五丁に伎己之米須四方乃久に
欲里多豆麻都流美都奇能舩着云〻於保美氣に都加
倍麻都流等乎知許知に伊賜里都利家理と有は諸物

を奉れるも有れども主とは日〻の供御の御贄を云
り平兼盛集大嘗會歌に日貢物絶ず供ふる東路の勢
多の長橋音も轟に又万代を持ぞ榮えむ近江なる陪
膳の濱の海人の日貢はなど有も右の意なり又其御
贄を御調仕奉る國を御食都國と云なり万葉六十五丁
に御食都國日之御調等淡路乃野島之海子乃海底奥
津伊久利二鰒珠左磐に潜出舩並而仕奉之貴見礼者
又其反歌に三食津國野島乃海子乃と有は其御贄を
奉る由なり淡路國と云なり又二十一丁八隅知之吾大王
乃御食國者日本毛此間毛同登曾思又三十九丁御食國志

麻乃海部有之吾妹子之云々ハ此ハ謂ゆる速贄を奉
ふ依て云ふ〳〵十三五丁ふ高照日之皇子之聞食御食都
國神風之伊勢乃國者十八二十丁ふ御食國波左可延牟
物能等と有ふ日々の御贄を供奉るを以云ふ〳〵然
れハ稲穀ハ申すも更ふる御事ふて魚貝の食物と雖
も皇祖天神〳〵天神御子ふ事依〳〵授奉らせ給へる
御物ふ〳〵在けれハ天津日継高御座の至尊く至高く
御在〳〵坐を以て魚貝ハ人ふ漁〳〵して食物と成る事
即天神御子ふ仕奉る道此ふ在る事をふむ明らめ知
べし〳〵ける然れハ天武天皇四年御紀ふ詔諸國曰自
今以後制諸漁猟者莫造檻穽及施機槍等

之類と有る大詔の如きハ皇祖天神の定授させ給へ
る道ふ背かせ給へる者ふ〳〵て甚〳〵忌〳〵き大禍事
ふふむ有ける○諸魚皆仕奉白之中ハ天鈿女命〳〵天神御
子の御贄ふ仕奉りしとうむや否やと問給へるふ對奉
りて何れも御命ふ任ふ仕奉らむと申〳〵て背奉る者
の無りし中〳〵ふ〳〵○海鼠ハ本草和名ふ海鼠出崔禹
和名古と有り記傳十六十六丁ふ和名抄ふ海鼠崔禹錫
食經云海鼠似蛭而大者也和名古本朝式加熬字云伊
理古と有り今俗ふ生海鼠串海鼠金海鼠と云名も有
り内膳式供御月料の中ふ熬海鼠八斤四両又海鼠腸
四升五合ふど見ゆと見えたり太神式九月神嘗祭條

小熬海鼠十二竹度會宮ハ八竹ぶど有て神廷ハも朝
廷ハも供御ハ奉る例なるハ其天鈿女命の罰なりせ
給へる後ハ其大御饌ハ令預給へるが故ハて右ハ謂
ゆる口女の例とハ別なるなり○此口子ハ其答奉る
ぬ口を捕へさせ給ひて罵給ふなり○不答之口而ハ
記傳ハ許多閉世奴口登言兵と訓れたり右ハ諸魚皆
仕奉白之中海鼠不白と有る是ハて答だハ爲ぬ口ふ
ハ有て用無しと宜へるハて即此ハ拆給ふ所以ふ
り○紐小刀ハ記傳十六丁ハ比毋賀多那と訓べし
此物海神宮段ハ其和迩將返之時解所佩之紐小刀著

佐保比古王の謀叛むとする所

其頸而返于垣宮段ハ即作ハ鹽折之紐小刀授其妹曰
以此小刀刺殺天皇之寢云ゝ作ハ鹽折之紐小刀而授
妾と有り此事書紀ハ仍取七首授皇后曰是七首佩
于裀中當天皇之寢迺刺頸而殺焉云ゝ故受其七首獨
無所藏ハ著衣中と書れたり和名抄ハ大刀太知小刀
加多奈と有て加多那ハ片刃の小刀なり紐と云ハ懷
中ハ佩て下帶ハ揷す故の名なり彼玉垣宮段ハ見元
たる密ハ天皇を刺奉らむ料なれば必懷中ハ隱し給
ひたる可し倭建命段ハ以劔納于御懷幸行ふどり有
り今宇受賣命と女神ハ坐故ハ懷中ハ佩給へるハや

或人云く今世ハ脇差と云物ハ脇差の刀と云て古のハ六七寸許の長さにて懐中ハ隠して差す物なり脇方へ寄せて差す故ハ脇差と云り用心の為ハ隠し差て身を守る刀なる故ハ守刀と云り東山殿の頃より下部の者など顕して腰ハ差し初しと見ゆ今世の脇差ハ其形大ハ変しなりと云り此中昔の脇差刀と云物即上代の紐小刀の傳りしなる可し補意と云れたるハて著明し通證ハ後撰集ハ東へ行く人ハ火打を贈るとて紀貫之ハ打て焼火の煙有ハ心佐須賀を忍べとて思ふと有と為家卿抄ハ佐須賀ハ腰刀なりと書しへ雲御抄ハ紐刀ハ小刀なり又心佐須賀と云ふと注させ給へるをしてと首出ハ史呉世家刺客傳劉向説苑曰尺ハ短劒頭似ると云れ記傳の

右ハ引れたる注ハも史記刺客傳云く索隠曰七首劉氏云短劒也塩鐵論以為長尺ハすと云と有り今女の懐劒と云物ハ決めて古の紐小刀の遺制なる可しし又釋氏ハ戒刀と云て懐ハ物為るとも佐須賀と云るハど此彼思合す可なり

○折其口故於今海蔵口折也ハ此ハ天鈿女命紐小刀を取持して其答へ為ずして相ひ居たりし其口を割せ給ひしハ依て其より以降海蔵の口自ハ裂なりとハて彼口女ハ海神ハ制られ奉りて餌帝と云物の無きと此と同日の談なり備此時天神御子の大命ハ従奉り難て右の如く口を折れ奉りしより海中ハ在ゆる海蔵ハしも殘無く其子孫と云ハて無く其湿氣ハ依て自然ハ生出る者なると何れも其

形相異ふる事無くして其口の析けて生るゝ事ハ
と其一時の罪に依て皇祖天神の産靈の御有狀も異
らせ給ふが故に各相其形に成出る事ふる天神御子
の大命に違奉る時ハ天地の間に其御罰を免れ奉る
事能ハざる事如此しゝ然れば此に故於今海蔦口析也
の文ハしゝと深く意有て語傳られし者と見えたり又海
神宮段の口女の罰せられ奉るも此に異ふらず如此
く出魚に至るまで皇祖天神の御罰有り況て天神御
子の大御宝にして天神御子の大御食國の内に住ひ
天神御子の天津日継の瑞穂を食ひ天神御子の御贄
の魚物を賜り性命を保有ふゞ天神御子の大命に
背奉り天神御子の大御蔭と思ハざる者の其御罰め
や如何に在ふむ皇祖天神の天照しゝ
見行して政言給ふ有狀甚恐くとる○是以い記傳十

六十七ナ
に上の追聚鰭廣物鰭狹物云々の事を兼て云
るゝ海蔦の事に係らず云れたり上件天鈿女
命の大小雑魚を追聚めて神問しに問給ひけるに何
しも御命の任に仕奉る可き由を申せるに唯海蔦のみ
答申さりしゝば其口を割て罰めさせ給へるに依
て海中の大小雑魚共に残る所無く天神御子に仕奉
る事ハ全く天鈿女命の御功に依れる事ふる故に此
ハ専海蔦に係れる事云も更ふ如何にと成れば海
蔦の事まで及ハせ給へ(ば)ハ大小雑魚の事を盡し
て残る所無き由を此を云所ふればふるを思ふ

△國号の起ハ右ニ三六十小引る志摩風土記小島著安曇別神々迹也云々天日方奇日方命至此舉言云豊志摩魚足三國哉後竟為國名ニ見え たり此天日方撫日方命の御言小豊島魚足御國哉と宣ひ事の有り終小國号と成り小て其ハ遥小後の事なり

○御世御世ハ道昭本小依れり其余の本小ハ二字を脱せる故小記傳十六十七小御世ハ御ニ世ニと重ねて有けむか脱たる可し一舊事紀小御世〻〻速贄ニ有り〻て云れたり○島ハ志摩國なり△古方境未定らざり〻時摠名ハ伊勢國なる中小東南方小島ニの多く在る地を仍て別小島國とハ云けむを一國ニ立たる程の事小ても無りしかバ猶後まで廣く伊勢とハ云り〻なり倭姫命世記垂仁天皇二十六年條小倭姫命世御乘船給御膳御贄處定幸行島國ニ崎島（島鶏倉慥柄等小）朝御饌夕御饌止詔而湯貴潛女等定給ヒ還坐時神堺定給支戸島

志波崎佐加太岐島定給而伊波比戸居給而朝御氣夕御氣處定奉然倭姫命御舩留而鰭廣魚鰭狭魚貝津物息津毛辺津毛依來小海塩相和而淡在小留故淡海浦止號支伊波比戸居島名戸島號從其以南塩淡甘支其島子淡良伎之島號支其處參相ヒ御饗仕奉神子淡海子神止號ヒ社定給支其處子朝御氣夕御氣島定支還幸行其御舩泊留在志處子津長原止號支其處小津長社定給支ニ有小て島國ニ云名義灼然〻なむ其二十七年小島國伊雜方上葦原中在稲一基生木波一基仁為ヒ末千穂茂也云〻ニ云事

の有て已く島國の号をバ普く云ふ趣なるを然るに國造本紀に島津國造志賀高穴穂朝出雲臣祖佐比祢足尼孫出雲笠屋命定賜國造と有を万葉七三十一丁に伊勢海之白水郎島津我鰒玉取而後毛可戀之將繁と有に伊勢海之島津之白水郎と云義なるが右の世記に御船の泊留りし處を津長原と号給ひし如く其島の圍める中に國在て自然に津泊と成れる由にふむ有ける偖右の如く島又島津共に國号に呼ぶ事なれど伊勢國に隷たりし故に右の歌に伊勢海と詠し又其三十六九丁に御食國志摩乃海部有之と有を十三五に御

傳廿一三百五十三に云る

今世少て鳥羽津なるゝ云て天下に名高き津留なるゝ思合す可し

島津と

以て此に

食都國神風之伊勢乃國と有て御食物に云ふ志摩國なるを伊勢と云ひ神樂に立歌に伊世之末乃安未乃止祢良可太久保乃計於介ゝし源氏須磨二十九丁に伊勢島や潮干の潟に阿佐理てし言甲斐無きハ我身なりけりと有など此等ハ打任せて國名と成れる後なれども猶伊勢島とハ云て伊勢國に屬る島なる由なり其志摩國と云名御紀に見えず天武天皇四年御紀に三位麻績王有罪流于因幡云ゝと有る事を万葉一卷に麻績王流於伊勢國伊良虞島と有り参河國神名帳に正三位伊良久大明神坐渥美郡と有て今も伊良胡村と云有て志摩國答志郡に向ひて伊勢とハ隔れる地なるが其海中に在る故に伊良虞島の名ハ有なるめり此を以見るに當昔未志摩國と云号ハ非ずして猶伊勢國の内なりし然して續紀に神護景雲

なる事御紀に幸伊勢賜所過神郡及伊賀伊勢志摩國造等冠位并免今年調役と見え又賜所過志摩而雖男女年八十以上稲各人五十束と有て本なり一國に有しなり猶伊勢國に管なりしと見えて

但持統天皇

二年二月癸巳朔正五位下敢磯部忍國為志摩守と有て是始おりを思ふに其境志摩と云ふ國名を東ふ事
りれたるかや此人は神護景雲元年夏四月癸巳伊勢國多氣郡人外正七位下敢磯忍國献錢百万絹五百疋
稲一万束授外正五位下と有る其功に依て志摩守に
任さしむる可けれども此人なほの奏請と云たる國
異なるかや有むと
続きて國司の事見ゆ
○速贄は先贄と云事
り説へ○神武天皇戊午年御紀に是後天皇欲省吉野
之地云々巡幸焉云々及縁水西行亦有作梁取魚者梁此云柵
天皇問之對曰臣是苞苴擔之子苞苴擔此云珥倍毛苞此則
阿太養鸕部始祖也と有る此苞苴擔之子を古事記に
は贄持之子と作れたり是苞苴を贄と訓む證なり然
して仁德天皇前御紀に爰皇位空之既經三載時有海

○此贄を取る人を贄持の子と云ふは神事歌の贄人の如く儒書に似たり
○此事を云ふ紀伊國人小玉神之戎為天皇贄人之事見え供進御食
○國は志摩にて此は伊勢國司の管轄なり
を始て此に國司を置しなりと
○此事を云ふ雲風記に島根郡朝酌郡熊野大神命詔朝御饌島養多郡饌島養五贄組之處定給ひ見えたり
○苞苴を贄と訓む事見えたり

人賚鮮魚之苞苴献于苑道宮也と有る此事を古事記
には二柱各讓天下之間海人貢大贄と書されたり同
天皇三十八年御紀に播磨佐伯部献苞苴と有て牡
鹿を供進れる事有り此は苞苴記傳十六十七丁に和名抄に
唐韻云苞苴裹魚肉也日本紀私記云於保迩倍俗云阿
良万岐と有て迎閑と云魚新饗の切れはなれて本新物を神にも人にも饗へ自
も食ふなり出たり偖朝廷に貢る御贄を大に閑とは
云なり取要と云れたるが如く其阿良万岐の事は傳廿
二二百七十七丁束草の下に注せり然るに雄略天皇八年御
紀に新羅國背誕苞苴不入於今八年而大懼中國之心

△其十七年御紀ニ詔土師連等便進應盛朝夕御膳清器者云々名曰贄土師部と有る此土師連は多くは出雲氏族なりと此は供御の清器を作へ故に別て贄土師部と云なり若て此御膳字を美都岐と能こ訓ける事右の例に同じくして大ッ謂有る事なるべけり

ニ有て苞苴を美都岐と訓せたるハ上二百五十六丁
三百六十八丁
ニ注るが如く日次の御贄を貢奉るなり取れるなり△
持統天皇六年御紀ニ御阿胡行宮時進贄者紀伊國牟
婁郡人云々兄弟三戸服十年調役雜徭免校抄八人
今年調役と有ふとも供御の御贄ハ其事云ル更ニ不ル問ル
又記傳ニ其御贄ハ御食津國なり土産物種々貢る
なり師云御食津國とハ大御饌の御贄を貢る國を云
り食國と云とハ異なり内膳司式ニ諸國貢進御贄云
ニ右諸國所貢並依前件仍收贄殿擬供御と有て其品
物ふとも委しく擧られたり西宮記ニ贄殿在内膳中

大宰及諸國所進御贄納備供御と有りと云れき夫木
卅三ニ手向べき神の贄とて事寄せて御前の川原梁
作てけり散木集ニ懲果ぬ贄の朝初将朝ニ為る家ニも
非で人返しけりふと訓有り袖中抄十六ニ贄と云ハ
咋物ニ就たる名なり公ニ奉る物をも御贄と云ふ又
私ニ咋物する所をも贄殿と云ふ但贄ハ多くハ魚ニ
依たる名ふめり魚入たる桶をハ贄桶と云ひ贄殿と
云も然合せふと為る所なり飯する所をハ大炊殿と
こう申めれ然ハ有れしと咋物ニ詞似たれハ其贄ニ通
ハむこと遠ニ可らずと云こと見えたり私のをも贄殿

と云けるハ宇治拾遺物語二十七に左京大夫家の事に
鯛の阿良万岐を云し贄殿に持参りなり」と有る是に
り備に閑と云ハ煮釜と云物にて物を鍋に入て煮る
に起れる称なるべしこれも思ひ贄の魚を捕ると贄人と云ハ神樂篤枕
に古毛万久良以也大加世乃ら止仁也安以曽大加仁留安見於呂志佐天佐之乃保留
戸比止曽之支川幾乃保留安見於呂志佐天佐之乃保留又安女仁万須也止與子加比女
留夜安以曽大加仁戸比止曽之支川幾乃保留安見於呂志佐天佐之乃保留又安女仁万須也止與子加比女
呂志佐天佐之乃保留安美於呂之佐天佐之乃保留と有る是なり又夫木集十八巻
三島社に奉りける歌三島野に神の御鷺を引居て始て
めの日ハ無し大年の贄と云ふ大年の贄と云ハ年
有ハ生贄の義なり又和名抄祭祀具に犧牲訓伊計迄信と
に同じく備景行天皇十二年御紀に白鵠乃生御調と有
訓て又御紀の中に多字を閑那理と閑ゞ此彼有

ハ肥後風土記に玉名郡長渚濵昔者大足彦天皇珠球磨噌吸還駕之時泊御船於濵云ふ又御船左右游魚多
之棹人吉備國朝勝見以鈎釣之多有所獲即献天皇勅
所献之魚此為何魚朝勝見奏申未解其名止似鱒魚耳
歴御覧曰俗見多物即云に信佐に今所献魚甚此多有
可謂に倍魚今謂に信魚其縁也と見元て迩信と多
字の訓に當る言ゝ如し但贄ハ横山の如く置足
して献れるゝ其言の轉りて多きと云言と成れ
るふも有べくや

速贄の事ハ記傳に速贄とハ初物を云ふる
可し速と初とハ意通へり今世に走と云て速き意ふ
り此名此〳〵外に古書にハ未見當らず源俊頼朝臣
集に垣根にハ百古鳥の早贄立てけり志傳の田長に
忍び難つゝと見元たり此事を袖中抄一に万葉抄を
引て鵙の草莖にハ古人の云けるハ鵙と云鳥ハ郭公

い宿を借て在けるが得出さにゐりける故ゝ郭公の
来る程ゝ鵙の早贄と云事を爲て万の草の莖ゝ生た
る出又ハ蝦などを取り云ゝと注せり然れば名の同
トきのゝこゝ有けれ此ゝ謂ゆる初物を速贄と云と
ハ大ゝ同じゝざる者ありけり備祝詞式ゝ多く初
穂と云事有ハ當年の新穀の初物を必先神ゝ奉らせ
給ふ（然る物）て禁秘御抄賢所條ゝ万物隨出来必先被奉と
有る此等の類と押且して初穂と云事ゝて三代實録
ゝ貞觀十二年九月十七日乙丑宗像樂谷云ゝ五神奉
鑄錢所新鑄錢と有て其告文ゝ仍所鑄作之早穂（ハツホ）二十

文手令捧持天奉出賜布源氏早蕨初ゝ今一所の御事
をあむ安ゝず念ト閑元さすゝるゝど閑元て蕨(五)土
筆別ト愛（シカ）ーき籠ゝ入て此ハ童部の供養して侍る初
穂ゝて奉れゝと有ゝどの類ゝて時有て（ゝ就）貢る御
贄の初穂を先賜る事を速贄ゝハ云ゝる可し備又記
傳ゝ志摩國ハ殊ゝ御贄を奉れりし國ゝて万葉六（三十）
九丁ゝ御食國志摩十三（五）丁ゝ御食都國神風之伊勢乃國
志摩伊勢の内ゝ（ゝ）ゝど有り今京ゝ成てし三代實録ゝ元慶六
年十月廿五日志摩國年貢御贄四百三十一荷令近江
伊賀伊勢等國驛傳貢進内膳司式ゝ諸國貢進御贄旬

〈脩此御贄の由ハ就て職原抄國司條ハ志摩高橋氏為内膳正者任之ニ仍他人不任之ニ有ゆ其高橋朝臣ハ膳臣の族なり内膳奉膳なり志摩國司と兼る事大ハ所收有べし大同類聚方十八ハ志摩国奥志摩國高橋連大魚之家方ニ見え伯家五代記永万元年七月廿七日条ハ志摩前司高橋經明と云人名と有るハ考へ合すべし〉

料云〻志摩國御厨鮮鰒螺起九月盡明年三月ニ別上下旬各二檐味漬腸漬蒸鰒玉貫御取夏蝮等月別揔五檐雜魚十二檐並少糀ハ伊ハ運進云〻節料云〻志摩國正月元日新嘗會二節各八檐正月七日十六日五月五日各三檐年料云〻伊勢國鯛七月七日九月九日五節各三檐鯛脊酢二檐二十籠一度鮪年魚二檐四壺二度蠣磯蠣

志摩國藻海松主税寮式ハ凡志摩國供御贄潛女卅人云〻ふど見えたり」と有り右ハ引る倭姫命世記皇太神宮御鎮座の後ハ倭姫命御船象給御膳御贄處定幸行島國ハ嶋崎島ハ朝御饌夕御饌止詔而湯貴潛女等定給豆還坐時云〻朝御気夕御気處定奉然後倭姫命御船留而鰭廣魚鰭狭魚貝津物息津毛辺津毛依來云〻其處ニ朝御気夕御気島定支ニ有て上古〻朝廷ハ奉來ルを以て神饌ハ分ち給ハ猴女君等也ニハ此時天鈿女命

其猿田彦神を送到らせ御在〻坐て安曇別神の主領せ給ふ島國ハ於て海中ハ在ニ有ゆ大小雜魚を悉く追聚させ給ひ天神御子の日貢の御贄ハ仕奉るむや否やと問給ひて海鼠の如く御答申さゞりし者をバ忽ハ其口を割て罰ハせ給ひ即其國の速贄を擎げて初國所知食す日向宮ハ復命させ給ひける時ハ其功績を褒賞させ御在〻坐て天神御子より其初穂をバ領ち賜へりしが例と成て御世〻ハ其國の連贄を奉れり初先其猿女君ハ今賜給ふ愛たき御例と成りとゝ然しバ世の漁事を為る者ハ何神よ

かりも先此天鈿女命の御恩頼をば仰尊ミ奉る事(可き)なるを然しも思ハざりけるこゝろ甚足ぬ事なりけれ況て
や其猿田彦神ハしも事代主神ハ御在し坐て元より
射鳥捕魚の事ハ功りき大神なりて渡らせ給へりけれ
ハ海幸山幸の事ハ就ても此二神を並べて崇め敬ひ
奉ら可き御事なりけるに柳魚物ハしも上件ハ注るが
如く保食神の御身より成出し物なる事云も更なる
が稲穀の事ハ云ハゞ保食神ハ其御璽神なり倉稲
魂神ハ蒔殖て作養ふ神なりて体用の差有が如く魚物
の事ハ云ても保食神ハ其御璽神ハ在して天鈿女命ハ

其を捕食す事ハ御功坐て此も体用の差別御在し坐
が如くなむ有けるに已ハ傳十九 六十二丁五 百四十丁 ハ注るが
如く豊受大神を屋船命と聞えさする其亦名を大宮
賣神と申せるハ天鈿女命も大殿ハ在して大宮を侍
衛給ふ御功坐が故ハ大宮比咩命と称奉しるを其同
徳の由を以て一桂ハ大宮賣命と祀しるも多くハ二
神ハ係りて彷彿しきが如くなるハ右の如き所以御
在し坐が故なり故四時祭式 祈年祭條ハ高御魂神大
宮女神云し各加馬一疋 月次祭條ハ其大神宮度會宮(大神宮度會宮云ゝ)
高御魂神大宮女神各加馬一疋 ゝ見元大嘗祭式齋郡

及在京齋場ニ於て御膳八神を被祭る中ニ大宮賣事
代主と二柱神並び御在し坐ハ決めて天鈿女命
の此時の御功ニ就て殊更ニ會釋へ聞えさせ給へる
御事と見えたり大凡御饌の事ハ就てハ豊受大神と
天鈿女命とハ幽と顕ハ如ク本体と作用とハ
ちが如く相離ち奉らぬ幽契の御在し坐ハ故ニ
別てハ大宮賣命と大宮比咩命とハて同じ〻ずと
ハ申せども合せてハ右の如く大宮賣命と申して其
二神の差異を置ずして崇め聞えさせ給へるハむ決
めて幽深き致御在し坐ける御事とこそ伺奉る事ハ

りけれ然れば此ハ是以御世〻〻島之速贄献之時給
援女君等也と有る事の起原天鈿女命ハ始れる事此
を以て著明くハむ見えたりける記傳ハ給援女君等此事上代ハ例ハ
て有けむを良後ハや絶や為ハけむ此所の外ハハ物
ハ見えたる事無し但事ハ有つれども漏て記せる事
の無ハて〻有べし云しと云れたるが如く常例と成
たる上ハて〻ハ事珍らしく記さる可ハ非れば物ハ
見えざるハて此ハ其政事を記さるし所ハる故ハ其
ハ就て然有る狀を記されたるハれば古事記の御撰
有し當昔まで
の狀是ハる

宮内庁書陵部

右文久二壬戌年三月三日乙酉始焉此日　宗像大神三所宮御額初而祭于齋櫃殿頃日平譽重自越後來候之同十五日（丁酉）例　椙尾大神祭日也亦併祀焉四月三日乙卯此日合祭　石上　大神両所俱祭之同廿一日癸酉　賀茂大神之祭日也此日贈御額於在出羽國男重兼之許託瑞珠舍之舩焉　神威益加　神恩日厚而此書之成也速也

宮内庁書陵部 消印

實四月廿六日戊寅今日奉贈　春日社之御額于賢木舍宗像社之御鈴于瑞珠舍仍有祭祀之事焉穗積重胤于時歳五十有一

国立公文書館
National Archives of Japan